

伊能忠敬

研究

史料と伊能図

伊能忠敬没後二〇〇年記念事業「伊能測量協力者顕彰会」特集号
二〇一八年 第八十五号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」
二〇一八年 第八十五号

相模

伊能忠敬研究会

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.85-2018



国立国会図書館蔵

伊能大図93号部分（神奈川〜馬入川）

この図の東南部に描かれている測線は、いずれも第二次測量のルートである。第二次測量は、享和元年（一八〇二年）四月二日に江戸を出発。東海道を保土ヶ谷まで測量し、そこから海岸沿いに三浦半島を南下し、半島先端の三崎を廻り、半島の西側を海岸沿いに鎌倉に向かった。鎌倉では鶴岡八幡宮まで測量した後、海岸沿いに西に向かい、江ノ島を測量して更に西へ海岸沿いの測量を続け、茅ヶ崎、小田原を経て伊豆半島の測量を終え、箱根から再び小田原に戻り、東海道を平塚から保土ヶ谷まで測量して六月六日に一旦江戸に戻ったが、その後、六月十九日から再び東日本沿岸の測量に出かけ、江戸に帰ったのは十二月に入っていた。

三浦半島の付け根に当たる東部の海岸沿いは、現在では横浜、横須賀と人口も多く、大都市が連なるが、伊能図に描かれているこれらの地域は、小さな集落が点在するのみであり、横浜がどこかを探すのさえ難しい。

三浦半島の西側の付け根には鎌倉があり、鶴岡八幡宮に向かい測線が伸びている。伊能忠敬の測量ルートを辿ると、その地域の著名な社寺に向かう測線がいたるところに見られる。鶴岡八幡宮もそうした社寺の一つである。海岸線沿いに見られる由比ヶ浜や稲村岬、片瀬村、江島といった地名は、今も観光地として知られる。

江島の西の海岸沿いは、この当時馬入川（相模川）の河口まで緩やかな海岸線が続くのみであるが、現在は湘南海岸として、サーファーや若者に人気の地域となっている。



一方、東海道沿いには、保土ヶ谷、戸塚、藤沢、茅ヶ崎といった現在に続く集落が見られる。東海道は中山道とともに西に向かう幹線道路であり、第四次、第五次、第六次、第八次、第九次でも通過している。また、西部内陸部の測線は第九次測量の測線である。

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）

菱山剛秀

目次

85号

表紙解説

国立国会図書館蔵伊能大図93号部分

菱山剛秀

特集 伊能忠敬没後二〇〇年記念行事

- 伊能測量協力者顕彰式
伊能測量協力者顕彰会の趣旨
顕彰会概要・顕彰式開会の挨拶
伊能測量協力者顕彰のことば
顕彰式（式次第・写真・祝辞・挨拶）
参加御子孫
10 4 3 2 1
- 懇親会
懇親会開会挨拶
来賓祝辞
懇親会の写真
伊能忠敬史跡めぐり
史跡めぐり写真
二〇〇年記念墓前法要写真
記念誌「伊能忠敬日本を測る」
序言・目次・あとがき
正誤表
17 14 13
- 伊能測量協力者顕彰大会の記録
伊能測量協力者顕彰大会に参加して
小野公三
ご子孫
25 23
- 寄付者名簿
会員・会友
58 51 38 32 29 26
- ニュース・会員便り・お知らせ
新入会員自己紹介
伊能大図複製パネル特別展示
伊能隆男
59 59

伊能忠敬没後二〇〇年記念 伊能測量協力者顕彰会の趣旨

伊能忠敬研究会
イノペディア（伊能忠敬 e 史料館）

二〇一八年は、伊能忠敬の没後二〇〇年にあたります。彼が制作した日本地図は江戸末期から明治期に、世界に肩を並べる知的インフラとして日本の近代化に大きな役割を果たしました。

伊能の業績は、明治になって人々に広く知られますが、この地図は伊能忠敬個人、あるいは測量隊員たちだけでつくられたものではありません。測量ルートの沿道諸藩、町村、浦々の膨大な協力があつて成し遂げられたものであります。彼の残した測量記録ともいえる日記には、測量をサポートした1万人以上の名前が書き込まれています。また、各地に残されている測量時の記録には、伊能測量の模様、費用、測量を支えた人々の動きが詳細に記されています。

伊能忠敬没後二〇〇年に当たり、私たちはこうした伊能測量を手助けし、偉業の達成に導いた全国の伊能測量協力者の方々的事迹を顕彰し、後世に伝えたいと考えます。

伊能図の最終版である伊能家から明治政府に提供された控図も関東大震災で焼失しましたが、伊能忠敬研究会では、一九九五年頃から失われた伊能地図の発掘に努め、地図・測量・ウォーキング等の諸団体に協力をいただき、国内外に残された写しなどを調査してデータ化し、最終版伊能大図・中図・小図の復元をおこないました。香取市所蔵の伊能忠敬側の主要史料は、ほとんど国宝に指定されており、保存は完全に、手続きを踏めば利用も可能です。このうち、伊能忠敬自筆の測量日記28巻のデータ化も完了しています。

しかしながら、現代に伝わる伊能忠敬の測量を支えた側の人々の記録、記憶の整理は未だ大変不十分であります。博物館や資料館といった然るべき機関に収納されている記録や史料は別として、個人所蔵の史料や口伝による記憶は、二〇〇年の時を経て滅失の恐れが大きくなっています。こうした貴重な史料や記憶を後世に伝えてゆくことは、私たちの責務と考えます。

このような状況に鑑み、本会は伊能忠敬の測量隊に力を貸していただいた全国各地の人々に、現代に生きる私たちから感謝状を贈呈し、顕彰の志をお伝えするとともに、その話題が各地の記録の見直しや発見、保存の動きの加速につながることを期待しております。



顕彰会の会場となった学士会館

顕彰会概要

第一部

期日 二〇一八年四月二十一日(土)
会場 学士会館(千代田区神田錦町3-28)
次第 午後2時～午後4時 顕彰式
午後4時15分～午後6時 懇親会

第二部

期日 二〇一八年四月二十一日(土)
会場 内幸町ホール(千代田区内幸町1丁目5-1)
次第 午後7時～午後8時30分 記念落語会
立川志の輔『大河への道～伊能忠敬物語』

第三部

期日 二〇一八年四月二十二日(日)
次第 伊能忠敬史跡めぐり(都内)
二〇〇年記念墓前法要
源空寺(台東区東上野6-1-9-2)

開会の挨拶(顕彰式)

伊能忠敬研究会理事(島根大学名誉教授) 高安 克己

ただ今より、伊能忠敬没後二〇〇年記念「伊能測量協力者顕彰式」を開始いたします。本会には協力者御子孫と同伴の方々一〇七名、研究会員五十七名、会友十一名、伊能忠敬の三郎右衛門家から六名、来賓五名、合計百八十一名の御参加をいただいております。伊能忠敬没後二〇〇年記念を、このような盛会で迎えますことを皆様とともに喜びしたいと思います。

顕彰式は「伊能測量協力者顕彰のことば」から始まりますが、そのあと、お渡しする感謝状は、二〇〇年以上前のご先祖に差し上げる文章となっております。感謝状には、御先祖ごとに、それぞれ異なる御業績を記載しております。ご理解をお願い申し上げます。



開会の挨拶をする高安克己理事

伊能測量協力者顕彰のことば（顕彰式）

伊能忠敬研究会会員（東京農業大学客員教授） 榎本 隆充

皆様ご承知のように、伊能忠敬は今から二〇〇年前、一八一八年四月十三日（太陽暦では五月十七日）に生涯を終えました。享年七十三歳でした。

忠敬は、寛政十二年（一八〇〇年）の蝦夷地測量から出発し、文化元年（一八〇四年）に、まず東日本の沿海地図を完成させます。この地図は第十一代將軍家斉の台覧に供され、幕閣内でも高く評価されました。その結果、忠敬は幕臣に登用され、幕府事業としての西日本測量を命じられます。西日本測量に十一年余、日本で始めての実測日本図は忠敬没後の一八二一年に幕府に提出されました。

幕末期の一八六一年、アクテイオン号などイギリスの測量艦隊への伊能小図譲渡はよく知られております。隊長ワードはその正確さに驚き、幕府と交渉してこの図を譲りうけ、沿岸測量のほとんどを省略しました。当時、日本沿岸の英国海図はこの図により改訂されました。

近代国家として実測による国土の基本地図を必要とした明治政府は、伊能図を基礎に暫定的な国土地図、輯製二十万分の一図を作ります。明治十七年着手、二十六年に完成します。この地図が全て、三角測量による近代地図に置き換えられたのは昭和四年（一九二九年）でした。

贈位、国定教科書に登場、芝公園の記念碑建立、大谷亮吉による「伊能忠敬」の発行など、忠敬顕彰の活動も続きます。一九七六年に井上ひさしが、人生二山説を掲げた小説「四千万歩の男」も話題になりました。

一九九五年、フランスの伊能中図里帰りを期に発足した、私ども伊能忠敬研究会も、忠敬顕彰と忠敬史料および伊能図の探究を目的としております。多数の方々のご協力と幸運に恵まれて、大きな輪にひろがりま

緯度一度の距離を測ってみたい、併せて北辺の地図も作ろうと歩を進めた忠敬の熱意と勇気は、幕府事業としての全国測量に発展しました。幕府事業とはいえ、測量隊員は最大でも二〇名未満です。この人数で離島や急峻な海岸などが測れるわけはありません。諸藩、諸地域の支援が肝要でした。

諸藩、町村、浦々は、幕府諸役や測量経験のある地域の情報を集め、準備を整えて、精一杯の膨大な人足、船団、生活環境、通信手段などのサポートをしています。

本大会では、離島や地形急峻な沿岸各地の測量と、世界に誇れる伊能図の完成は、伊能の力量だけでなく、地元の支援があつてこそであったことを宣言したいと思います。忠敬没後二〇〇年にあたり、伊能測量に御協力いただいたご先祖に対し、伊能忠敬研究会、イノペディアをつくる会と伊能忠敬子孫一同から連名して、感謝状を進呈いたします。

皆様は、伊能測量支援の事績を、二〇〇年語り継いでこられました。一般には忠敬と伊能図への賞賛に比し、諸藩、村々の努力に対する評価は充分とはいえません。この顕彰大会をきっかけに、思いを一新していただけることを期待します。



顕彰のことばを述べる榎本隆充会員

伊能測量協力者顕彰式

学士会館 2階(202号室)
14時00分～16時00分

式次第

開会宣言

伊能忠敬研究会理事(島根大学名誉教授) 高安克巳

来賓等紹介

顕彰のことば

伊能忠敬研究会(東京農業大学客員教授) 榎本隆充

感謝状進呈

第一～四次測量

第五～四六次測量

第七～四八次測量-1

第八次測量-2、九次測量

来賓祝辞

国土地理院院長 村上広史

感謝状を受け取られた方々のご感想

伊能測量協力者子孫代表挨拶 代表幕府葦山代官子孫 江川 洋

主催者御礼挨拶 伊能忠敬研究会名誉代表 渡辺一郎

終了挨拶





司会の小川真由美さん



来賓の皆様



子孫の皆様



会場で感謝状を受ける子孫の皆様



第八次、第九次測量代表の手銭白三郎さん



第一次から第四次測量代表の伴田孜さん



第五次、第六次測量代表の石井洋さん



第七次、第八次測量代表の川浪富士夫さん



感謝状受賞の感想を述べる石井洋さん



感謝状受賞の感想を述べる手銭白三郎さん



伊能家の関係者を紹介する渡辺名誉代表



伊能三郎右衛門家（忠敬家）の関係者

来賓祝辞（顕彰式）

国土地理院 院長 村上 広史

本日は「伊能測量協力者顕彰大会」にお招きいただきありがとうございます。ご存じます。

伊能忠敬を支えた協力者の方々の御子孫で、全国各地からお集まりいただいた方々を前に、私からも一言、お祝いの言葉を述べさせていただきます。と思います。

まず、「大日本沿海輿地全図」、いわゆる伊能図が作られた時代を振り返ってみますと、北方からは南下政策を取るロシアが我が国の領土に手を伸ばそうとしていましたし、我が国の近海には西欧列強の艦船が出没してましたので、沿岸防衛が、まさに「焦眉の急」でした。したがって、砲台の設置、海峡の封鎖、重要港湾の防御などのために、我が国の詳細な海岸線を把握することが国防上の喫緊の課題となっていたわけでした。したがって、伊能図は、迫りくる西欧に対峙していくという、当時の状況の中で、わが国がまさに求めたものだったと言えます。

しかし、日本の長く複雑な海岸線を高い精度で描くことは、極めて困難なことだったでしょう。伊能忠敬をはじめ当時の人たちが、どのようにしてそのような技術を習得していったのが気になるところです。

ご存知のように、当時は鎖国施策が取られていた江戸時代ですので、幕府の役人たちも、出島などを通してわずかに入ってくるオランダ語の西欧学術書などを研究していたようです。しかし、この小さな窓口からしか入ってこない情報でも、幕府は天文方という組織を持ち、当時の知的エリートを集めて、その内容を正確に理解していたようです。

天文方の役人たちは、測地学の重要なパラメータである子午線長の重要性を見抜き、測量精度を向上させるため、天体観測技術を活用した天

文緯度の観測も実用化しています。研究のためだけではなく、高度な科学や技術を実際に活用していたということですので、彼らは科学の社会実装という観点から見ても大変すばらしいことを実践していた、そしてその中で技術も習得していったと言えると思います。このような人材、組織、体制、知的基盤を国家として有していたということが、列強によって次々と植民地となっていた他の国々と我が国との大きな違いであったのかもしれない。

一方、伊能忠敬は、商人を隠居後に五十歳を過ぎてから、このエリート集団の天文方で、最先端の難解な天文学や天体観測技術を習得し、五十五歳からはこれらの学問を駆使して、実際に全国を徒歩で巡りながら、七十二歳になるまでのあしかけ十七年測量し続けたのです。まさに「一身にして二生を経るが如し」ということではないでしょうか。現代は人生一〇〇年時代とも言われております。寿命が遥かに短かった時代の伊能忠敬が一身にして二生を生きたのならば、私たちは、ひよっとしたら一身にして三生、四生を生きることもできるかもしれません。伊能忠敬をお手本にして、高齢者が元気になることで、我が国全体を明るくすることができないのではないかと思います。

このように、伊能図の作成は、伊能忠敬ただ一人の功績のように理解されがちですが、考えてみますと、彼ひとりだけで、これだけの大事業を完成させることはできなかったわけです。ご存知のように、彼は伊能図の完成を待たずに他界し、実際に地図を完成させたのは彼の弟子たちだったといわれています。また、彼の測量隊に加わった隊員たちがいなければ、当時の測量は不可能だったわけですし、測量して行った先々の現地で、測量隊を物心両面でサポートしてくださった協力者の方々がいなければ、日本全国を徒歩で測量し続けることなど、とても困難だったわけです。

私も国土地理院に入って間もないころ、先輩たちと一緒に三角点の測量のためにいろいろなところに出かけて行ったのですが、現地の宿が居心地の良い宿か、いい食事が出るか、さらには、宿屋のご主人がいろいろ

る気配りしてくださる方か、などということは、先輩たちと元気に測量作業を行う上では、大変重要な要素だったのです。つまり、伊能図の整備という大事業も、彼の弟子たちや現地の協力者の方々のご努力があった初めて成し遂げられたものと言って過言ではないのです。したがって、本日、伊能忠敬の測量を現地で支援された協力者の方々のそのご子孫の方々と一緒に顕彰することができるのは、大変意義深く重要なことだと思いますし、この顕彰大会を企画された皆様方に深く御礼を申し上げます。

ところで、伊能忠敬の弟子たちが伊能図を幕府に献上したのが一八二一年です。その後、明治時代になって、私が現在勤務しております国土地理院の前身の参謀本部陸地測量部が、全国土をカバーする統一縮尺の近代的な地図として「輯成二十万分一図」を整備し、一八九三年に完成させました。この地図が近代日本の発展の基礎を築いたのですが、そのベースになったのが七十年以上前に作成されていた伊能図だったのです。まさに、伊能図が日本の測量の出発点となり、今年で一五〇年になる明治維新後の近代日本の発展を支えたと言えるわけです。

その後、測量技術は大きく進歩し、宇宙技術も活用することで遥かに容易かつ正確な測量が行えるようになってきました。ご存知のように、現在では、我が国の地図も極めて正確に整備され、それをどこにいてもスマホなどで自由に見ることができるようになっています。地図を作る技術が普及してきたこともあり、個人で地図を作ることも容易にできる時代です。

しかし、その基礎を築いた伊能忠敬、そしてその測量作業を全国で献身的に支えてくださった協力者の方々の功績が色褪せることはありません。ですから、今年には伊能忠敬没後二〇〇年ですが、没後三〇〇年、四〇〇年、そして五〇〇年においても、このように盛大な記念行事を行うことが、近代日本の原点を未来の世代に伝えて行く上で、大変重要ではないかと思えます。そのためにも、伊能忠敬やその協力者の方々のご功績をこれからも後世に伝えていく必要がありますので、本日お集まりの

皆さんのお子さんやお孫さんにも是非お伝えいただきたくお願い申し上げます。

最後になりましたが、このすばらしい事業を成功させた伊能先生に敬意を表し、また、ご協力された皆様のご先祖様に心からお礼申し上げます、本日のお祝いのごとばとさせていただきます。本日は誠にありがとうございます。



来賓挨拶の村上広史国土地理院長

伊能測量協力者 子孫代表挨拶（顕彰式）

幕府葦山代官子孫 江川 洋

今回この伊能測量協力者顕彰大会に参加をさせていただくことによつて、こんなにも多くの人々が伊能忠敬の行った偉業にかかわりサポートしたということを知りました。またそれら測量に協力した大勢の人物の名が忠敬の手によつて細かく記録され残っているということにも大変驚きました。しかしそれら人物の名前が残っているからと言って二〇〇年の後その子孫をたどり今日のこの会の開催へと結びつけられた関係者の方々のご苦労さぞかし大変であったことと思われまふ。本日は伊能測量協力者顕彰大会に協力者の子孫の一人として参加できましたこと心より嬉しく思っております。

私の祖先は伊豆の葦山という地で代々代官を務めておりました。その祖先の一人、江川英毅という人物が伊能忠敬の測量に協力をいたしました。この英毅自身も天文学・測量に造詣が深い人物でした。それだけに伊能隊の測量に協力し伊能忠敬という素晴らしい人物に接することができたことは英毅にとつても大変大きな喜びであったに違いありません。英毅は測量への協力以外にも手紙などを通して忠敬と個人的に交流があったそうです。英毅には英龍という息子がおりましたが英毅が忠敬と交流を持っていたということは息子の英龍にも大変大きな影響を与えていたのではないかと思います。この英龍、私の祖父の祖父、高祖父に当たる人物ですが、葦山反射炉そして品川の台場の築造に深く携わりました。英龍がこのような事業を成し遂げることができたのは直接ではないにしても父親を通して伊能忠敬という人物に触れることができたことも大きな要因であると思います。

私もあの歴史的人物と自分の祖先が交流を持っていたということを知り頃から聞いており、それを大変誇りに思っております。今回この会に測量協力者の子孫である皆さまと共に参加することができ、さらにその思いを強くいたしました。

先祖も伊能忠敬による大事業に協力者の一人として参加できたことを誇りに思っているに違いありません。先祖に代わりまして今回この会を開いてくださった関係者の方々には深くお礼を申し上げます。

最後になりますが今後伊能忠敬の研究がさらに進み、より多くの人々の心を動かすことを願ひ挨拶と代えさせていただきます。



子孫を代表して挨拶する幕府葦山代官子孫 江川 洋さん

参加御子孫

第一次測量

蒔苗博道 陸奥国 野辺地 回船問屋 島谷清吉
 蒔苗景子 同

第二次測量

足立知代 駿河国 沼津領 口野村 名主 武兵衛
 足立進 同
 加藤浩也 同 下総国 行徳本村 名主 加藤惣右衛門
 加藤真理 同
 鈴木裕士 上総国 金谷村 名主 四郎右衛門
 黄川田澄子 陸前高田 小友村衣地 飯肝入 黄川田与兵衛
 黄川田成子 同
 黄川田真衣 同
 須賀原修二 同 三陸宮古 磯鶏 肝入 茂兵衛

第三次測量

坂内清一 会津若松領原宿 会津郷頭 坂内市郎右衛門
 坂内弥生 同
 松木英一郎 出羽国 横手町 本陣 松木吉右衛門
 武田安一(欠) 出羽国 能代町 庄屋 相沢金十郎
 武田直樹 同(武田安一氏 代理)
 伴田 攻 越後国 岩船町 年寄 伴田与惣左衛門
 伴田美智子 同
 山本良一 越後国 出雲崎町 良寛弟 橘屋 山本由之

第四次測量

久保田総一 遠江国 榛原郡 川尻村 名主 惣兵衛
 赤堀みさを 遠江国 城東郡 成行村 名主 仁兵衛
 小野恵美子 遠江国 横須賀城下 西本町 治郎八
 鈴木喜美子 同
 肥田嘉昭 北国 脇往還伊部宿 本陣 肥田加兵衛
 肥田文字 同
 城石闔子 越中国 射水郡 十村大庄屋 高島庄右衛門
 石黒信二 越中国 射水郡 高木村 測量家 石黒 信由
 笹井敦子(欠) 佐渡国 澤根村 廻船業 浜田屋治左衛門
 白井尚子 同(笹井敦子氏 代理)

第五次測量

和田正希(欠) 紀伊国 太地浦 大庄屋 和田孫才治頼孝
 和田麻美 同(和田正希氏 代理)
 和田新(欠) 紀伊国 太地浦 捕鯨業 大地寛右衛門
 和田千明 同(和田新氏 代理)
 和田直子 同
 小野公三 播磨国 明石領 垂水村大庄屋 小野兵治郎
 小野理枝 同
 三木敏明 播磨国 網干陣屋京極能登守道役三木平右衛門
 詫摩祥江 岡山 城下 脇本陣 宮城吉郎兵衛(第七次・第八次)
 宮尾昌弘 安芸国 阿賀村大庄屋 宮尾三兵衛
 朝倉昇(欠) 周防国 徳山毛利藩 御用絵師 朝倉湖内
 朝倉佐江子 同(朝倉昇氏 代理)
 朝倉順子 同
 岡本みよ(欠) 毛利領 小郡宰判 小俣村 庄屋 上田庄蔵
 斎藤昭(欠) 石見国 長浜村 長浜十郎治(斎藤重祐)
 斎藤重昭 同(斎藤昭氏 代理)
 手銭白三郎 出雲国 神門郡 大年寄 手銭官三郎

石井 洋 因幡国 青谷町 庄屋 石井世左衛門
大橋 開智 同
宮下 幸一郎(欠)若狭国 日向浦 庄屋 庄左衛門
宮下 和歌子(欠)同

第六次測量

川端 習太郎(欠)播磨国 昆陽村 本陣 川端七右衛門
川端 康夫 同(川端 習太郎氏 代理)
奥宮 正太郎 土佐藩 普請方 徒目付 奥宮弁三郎
大久保 朝子 同
土器屋 由紀子 同
高原 雄児 土佐国 奈半利浦 庄屋 高原琢右衛門
福田 仁 土佐国 大津浦(土佐清水) 庄屋 上岡弁之丞
山田 浩司 伊予国 西宇和郡 三崎浦 本陣 組頭 甚右衛門
堀内 昭三(欠)松山領 興居嶋大庄屋 郷士 堀内五左衛門(第五次)
庄司 昭子 同(堀内 昭三氏 代理)
森田 蒼生 伊予 小松藩 浦奉行 兼代官 森田五右衛門
揚 三容 讃岐国 高松領 政所 御用案内 上野瀬平
揚 孝子 同

第七次測量

菱沼 要治郎 武蔵国 菖蒲領 篠津村 名主 治兵衛
矢橋 潤一郎 美濃国 中山道 赤坂宿 本陣 矢橋広助
大西 一美 姫路領 加古川 本陣 鍵屋 権兵衛
大西 京子 同
河内 健斗 毛利領 呼坂宿(周南市)本陣 河内屋 藤右衛門
河内 善徳 同
藤音 浄明(欠)豊後国 神崎村 教尊寺住職 藤音浩然
石上 幸子 同(藤音 浄明氏 代理)
小野 友子 薩摩領 大隅国 浦役 町田太郎兵衛

小野 公彦 薩摩領 大隅国 浦役 町田太郎兵衛
小野 さやか 同
高月 雅 薩摩国 山川湊 大迫 けさ
益田 知香子(欠)天領 天草上島の大島子村 庄屋 益田利三郎
中川 篤 同(益田 知香子氏 代理)
藤田 祐香(欠)天領 天草樋島大庄屋 藤田左仲太
河野 俊正 肥後国 莊寺村 庄屋 徳永忠左衛門
河野 由紀 同
山根 季久子 備後国 戸手村 庄屋 信岡栄治
山根 靖彦 同

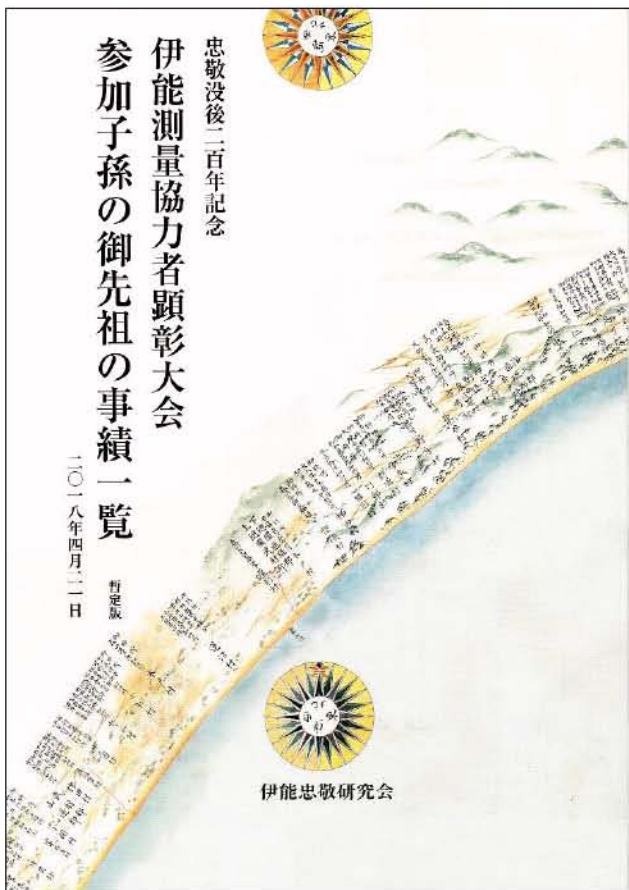
第八次測量

中村 拓郎 甲斐国 川口村 社家 中村 備後
中村 美代 筑前国 箱崎宿 庄屋 中村久治
中村 善郎 同
中村 律子 同
福田 里香 同
川浪 富士夫 肥前国 松浦郡 久原村 酒造家 川波良助
岩橋 伊津子 佐賀領 山方村 油屋 忠兵衛
副島 桂子 同
中島 惇 肥前国 杵島郡 上小田宿 本陣 中嶋伝右衛門
中島 米子 同
吉瀬 精司 久留米領 山北村 庄屋 多治右衛門
吉瀬 智子 同
久保山 隆吉 久留米 善導寺町 門屋 彦左衛門
久保山 孜子 同
中村 良紀 肥前国 鹿島領 音成浦 与右衛門
川口 正志 肥前国 大村領 郷士 川口六右衛門
川口 順子 同
楠本 武之 肥前国 針尾島 山目付 楠本文助
楠本 美紀 同

第九次測量

坪井隆治	五島列島太ノ浦浦役坪井三之助	同 繁弥
中野正治	長門国 長府領西市駅 本陣	中野新左衛門
友田修司	安芸国志路原村 庄屋	源三郎
土屋武之	出雲国木次町 土屋半十郎	
佐々木清之助	因幡国用瀬村 庄屋	玉谷又兵衛
佐々木慶宏	同	
佐々木弘毅	同	
中和 健	但馬国出石郡三木村 大庄屋	中和岡右衛門
加賀尾 宏一	丹波国追入村 本陣	喜兵衛代理 五兵衛
赤井公義	丹波国草野村	赤井伊三郎
赤井寿美	同	
桂 文子	丹波亀山城下	本陣 桂善右衛門
桂 崇文	同	
河原林 修平	同	
臼井良雄	信州北国往還 麻績宿本陣	臼井忠兵衛

江川 洋	伊豆韮山 幕府代官	江川英毅
橋本敬之	子孫江川 洋 付	学芸員
坂野 正	伊豆下田湊 名主	坂野屋源次郎
坂野弘美	同	
今村政純	(欠)伊豆山温泉	中田屋喜八
橋本 茂	同 (今村政純氏 代理)	



忠敬没後二百年記念
伊能測量協力者顕彰大会
プログラム

平成30年(2018)4月21日, 22日

伊能忠敬研究会・イノペディアをつくる会
伊能忠敬子孫一同

伊能測量協力者顕彰式 懇親会

学士会館 2階(210号室)
16時30分～18時30分



懇親会開会挨拶

伊能忠敬研究会 代表理事 鈴木 純子

皆様、遠路、またご多用のおり、本日の「伊能測量協力者顕彰式」にご参集下さり、まことにありがとうございます。長時間にわたる式典、お疲れさまでございました。

ただ今から、懇親会をはじめたいと存じます。どうぞ、ごゆっくりとお寛ぎいただき、お食事とご同席の方々との交流をお楽しみ下さい。

伊能忠敬という人がいなければ、伊能測量が行われることはなかったわけですが、一方で全国各地の地元の皆様のご協力がなければ、この事業が成り立たなかったことも確かです。ご承知のとおり伊能忠敬は、測量の全期間について、測量日記を残しております。これは日々の測量の進捗状況を知るための貴重な史料で、国宝に指定されておりますが、測量隊の行動を中心としたこの日記からは、地元でのサポートの苦心や、尽力についての詳細まではわかりません。私も伊能忠敬研究会では、測量隊受け入れの経緯についての、各地の記録史料や地域史などの探索を通じ、測量事業にそそがれた、想像を超える全国的な協力体制の実像を明らかにすることをテーマのひとつとしてまいりました。忠敬没後二〇〇年を記念して、こうして皆様と一緒できることは、私どもにとりまして大きな喜びでございます。

本日お手元に配布しております「伊能忠敬一日本列島をはかる」という2冊の冊子は、測量活動の実像を、地域での参照の便宜を考えて、都道府

県別に紹介し、あわせて、各地の伊能測量記念碑、標柱などをリストにしております。紙面の関係もあり、なお加えるべき点多々あるかと存じます。これを手がかりに、皆様とともに一層の積み上げをはかってまいりたいと思います。よろしくお願いたします。

なお、この冊子の編集にあたりましては、全国の市町村に資料提供をお願いし、多くの熱心なご協力をいただきました。伊能測量へのご支援にも似た、現代のバックアップが各地から寄せられたことをこの機会にご紹介し、感謝とともに、私のご挨拶を終わります。

あとにもう一つ大きなプログラムがひかえており、お時間十分とはまいりませんが、どうぞお楽しみ下さい。

次第

【開会挨拶】伊能忠敬研究会 代表 鈴木純子

【乾杯・挨拶】東京地学協会 会長 野上道男

～閑宴～

【来賓祝辞】

日本土地家屋調査士会連合会 会長 岡田潤一郎

日本ウォーキング協会 会長 畑 浩靖

伊能忠敬大河推進協議会 会長 木内 志郎

～歓談～

【各卓 集合写真撮影】

【余興】

詩吟

北信流 小謡

【ご紹介】大西道一、福田仁、詫摩祥江

～歓談～

【各卓 集合写真撮影】

【閉会挨拶】伊能忠敬研究会 事務局長 菱山剛秀



懇親会開会の挨拶をする鈴木純子代表理事

来賓祝辞（懇親会）

東京地学協会 会長 野上道男

紹介いただきました東京地学協会会長の野上道男と申します。

一八七九年（明治十二年、約一四〇年前）東京地学協会は設立されました。創立に関わった榎本武揚は第三代会長でした。榎本の父箱田良助は一八〇七年に伊能忠敬に入門した高弟でした。そのような縁もあり、伊能の科学的業績に対して、没後一〇〇年一五〇年など節目ごとに、東京地学協会は講演会の開催や書籍あるいは地学雑誌の特集号の出版など、記念事業を手がけて参りました。



祝辞を述べる野上道男東京地学協会会長

皆さま方がご存じのように伊能図は海岸線と街道の地図です。海岸線は浸食や堆積あるいは地震に伴う地殻変動などによってその位置が変化します。一九六〇年代ごろから海岸線の人工改変も加速されました。伊能図は19世紀初頭の海岸線を記録しているという点で、非常に貴重です。

例えば秋田県の象潟は一八〇二年（享和二年）の第三次旅行で測量しています。象潟では鳥海山の岩屑なだれの丘（流れ山）がたくさんの島となつて、仙台湾の松島のようにでした。一六八九年（元禄二年）に芭蕉が「象潟や雨に西施がネブの花」という句を残しています（旅行最北地）。それから一三三年後伊能がここを測量しました。しかしその二年後の一八〇四年七月一〇日の地震で土地が隆起したため、これらの島は陸地の丘になってしまいました。伊能図と現在の地図を見比べれば、その変化がわかります。海岸域の環境変化を考えると、重要で確実な出発点は伊能図にあるということができません。

伊能は信心深い人だったようで、『測量日記』を読むと、測量旅行中に多くの神社を参拝しています。また几帳面な人だったようで、神社の名前と誰を祭っているか（祭神）を几帳面に記録しています。あまり注目されていないことですが、この記事も貴重です。ご存じのように、伊能の没後ちようど五〇年後の一八六八年に成立した明治政府は神社とお寺を分離する、いわゆる神仏分離の政策を実施しました。このとき平安時代の延喜式神名（じんみょう）帳にあるような由緒ある神社・社寺でさえ名前を変え、祭神も入れ替えました。

この神仏分離政策の実施は、藩に代わった県に

任されましたので、どの程度、神仏が分離されたか、は県ごとに異なります。伊能の「測量日記」はこのように、神仏分離政策以前の社寺の実態に関する全国規模の歴史的記録としても非常に貴重です。

伊能は日本では磁針は真北を指すものと信じて測量を行いました。実は西の九州地方、とくに対馬など、あるいは南の八丈島などでは無視できない大きさの磁気偏角が存在していました。従って当時の偏角の分布を反映して、伊能図は歪んだものとなっております。しかし几帳面で精緻な測量結果を残したので、逆に歪みの原因である磁気偏角の分布を明かにすることができました。地図としては歪んだものとなってしまいましたが、19世紀初頭の磁気偏差の分布を記録するという面からみると、伊能の測量成果と地図はそのための完璧なデータであるといえます。

その伊能図（中図方位測量値など）と真北を北とする現在の地図と比べると、19世紀初頭の日本における偏角の分布図が得られます。この研究はナウマン以来の課題で、最近では辻本元博氏も精力的にデータを蓄積しつつあります。このところ私もこの課題に取り組んでおります。電気を帯びた宇宙線粒子は磁力線と平行に磁極付近に強く降り注いで来ます。生命の遺伝子や気候に影響を与える地磁気の極は二〇〇年というような短期間でも大きく移動します。伊能が意図せずに残した地磁気のデータは地球環境の変化を考える上で、非常に貴重であるといえます。

三つの例をあげただけですが、伊能が残したも



野上道男東京地学協会会長

のは現在でも地学や歴史学の貴重な資料であり続けています。さらに先に述べたように伊能が意識し目的とはしなかったことであっても、その記録には貴重な価値があります。これからもさらに多くの研究課題の基礎データとして使われることでしょう。

今日は伊能の家系に連なる方々と伊能の大事業に関わった人々をご先祖とする方々が参集して、いらつしやると聞いております。伊能忠敬の大事業を賞賛し、また科学的価値の高い地図や日記などの貴重な記録を残してくれたことに感謝申し上げます、本日のお祝いのごことばとさせていただきます。

一般社団法人日本ウォーキング協会

会長 畑 浩靖

本日、伊能忠敬没後二〇〇年記念の「伊能測量協力者顕彰大会」が盛大に滞りなく開催されましたことを一般社団法人日本ウォーキング協会を代表して心よりお祝い申し上げます。

伊能測量の顕彰に当たっては、伊能測量開始二〇〇年を記念して一九九九年～二〇〇一年、足掛け三年、丸二年行われました「伊能ウォーク」がご縁でした。伊能ウォークは皆さんご承知かと思いますが、本日、主催者の伊能忠敬研究会様や日本土地家屋調査士会連合会様、国土地理院様並びに社団法人日本ウォーキング協会等が協力して、伊能測量の足跡を一筆書きで日本列島を歩こうという壮大なイベントでした。

歩くということで、伊能ウォーク本部隊メンバーを担ったのが、わが日本ウォーキング協会（JWA）のウォーカーだったということです。この折も、本日も参会の全国各地の伊能測量協力者のご子孫の皆様には、伊能測量隊のメンバーがそうであったように、大変お世話になりました。改めてこの場をお借りして御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

その後、二〇〇九年～二〇一五年、六年間行われました「完全復元伊能図全国巡回フロア展」に於いても全国の各県協会並びに会員がこぞって協

力し、伊能図の素晴らしさを通して伊能の功績を世の中に発信できたものと思っています。

結びに当たり、伊能測量の素晴らしさ、実績がこれからも未永く顕彰されますことを祈念し、また、伊能家関係者、伊能測量協力者ご子孫の方々並びに本日も参会の関係機関・団体等の皆様のご発展を祈念し、お祝いの言葉といたします。



欠席の畑浩靖日本ウォーキング協会会長に代わり祝辞を代読する司会の堀野正勝会員



日本土地家屋調査士会連合会

会長 岡田潤一郎

本日は、ここに多くのご来賓の方々、また、ご先祖が伊能測量にご協力された多くのご子孫の皆様のご出席の下、この「伊能測量協力者顕彰大会」が盛大に開催されましたことに、まずもってお祝い申し上げます。

私は、日本土地家屋調査士会連合会の会長をさせていただきます。よろしくお願いいたします。岡田と申します。



祝辞を述べる岡田潤一郎日本土地家屋調査士会連合会会長

私たちが土地家屋調査士というのは、法務省管轄の国家資格者でありまして、主に不動産登記のう

ち、表示に関する登記（簡単に申し上げますと、その土地や建物はどこにあり、持ち主は誰で、どのくらいの面積であるかという登記）に携わる仕事を行っているわけですが、その中で当然に図面（地図）の作成や測量も行っておりますことから、地図・測量の大先輩である伊能先生を尊敬するとともに、とても身近な存在に感じており、本大会を主催しております伊能忠敬研究会とも以前からお付き合いをさせていただいております。

そもその始まりとしましては、私たち土地家屋調査士の制度制定 周年（二〇〇〇年）の際に何か関連の記念事業ができないか、ということでした。当時、伊能忠敬研究会と日本ウォーキング協会、朝日新聞社が企画・主催していた「伊能ウォーク」に途中からお手伝いさせていただいたことがきっかけでした。

ウォークへの参加に加え、伊能図のレプリカを体育館などで展示する「伊能図展」を全国一七か所で開催させていただくとともに、途中からは全国の会員とその家族が「サポート隊」として、各地域地域で参加者の皆様へ湯茶やお菓子などを提供するサポート活動を行いました。その記憶は二〇年たった今もお多くの土地家屋調査士会員の心に刻まれております。

その後も富岡八幡宮の「伊能忠敬像の建立」に参加させていただいたり、二〇〇九年から二〇一五年にわたり各地で開催された「完全復元伊能図全国巡回フロア展」に参加させていただくなど、伊能先生や伊能図との関わりを深めて参りました。

伊能先生が星を見上げていた空には今では人工衛星が飛び交い、電波を送受信して自分の位置を知る時代となりましたが、その現代においても伊能測量隊がお作りになられた伊能図は精度も高く、見る者に感動を与える美しい地図であります。

今後より一層、伊能先生を始め、その測量に携われた方たちの功績が長く称えられることを祈念いたします。お祝いの言葉といたします。本日は誠にありがとうございます。

その他、伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会会長 木内志郎様からもご祝辞を頂戴いたしました。



祝辞を述べる木内志郎伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会会長

懇親会の様子(写真集)



開会の挨拶



懇親会開始



司会の堀野正勝さん



懇親会場全景



Dテーブル



Mテーブル



Hテーブル



Nテーブル

余興

詩吟 河崎 英一さん

忠敬肖像画 久保木清淵の賛

家門業を修め 前烈に篤し
 地域図を成し 国恩に報いる
 知るこれ勤渠 不朽のこと
 よく餘慶をして 児孫に在らしむ



詩吟を披露する河崎英一さん

北信流小謡 市川三津夫さん

小謡「鶴亀」

庭の砂は金銀の、庭の砂は金銀の、
 珠を連ねて敷砂の、五百重の
 錦や瑠璃の柁礎礫の行桁瑠璃の
 階池の汀の鶴亀は蓬萊山も
 外ならず、君の恵みぞありがたき、
 君の恵みぞありがたき。



小謡を披露する市川三津夫さん

参加者紹介



伊能忠敬の天文測量を研究している大西道一さん



土佐大津浦庄屋上岡弁之丞ご子孫 福田 仁さん



岡山城下脇本陣宮城三兵衛ご子孫 詫摩祥江さん



ご子孫との連絡を担当した幹事の戸村茂明さん

テーブルA

白井良雄
市川美津夫
嶋田秀樹
坂内弥生
坂内清一
岩橋伊津子
安川義巳
松宮輝明
副島桂子



テーブルB

吉瀬精司
稲垣 実
吉瀬智子
山本良一
石川清一
小野恵美子
鈴木喜美子
大内惣之丞
山浦佐智代



テーブルC

石上幸子
中村拓郎
柏木典子
室山 孝
柏木隆雄
江口俊子
加藤浩也
加藤真理



テーブルD

戸村茂昭
小野友子
小野さやか
渡辺一郎
川端康夫
田野圭子
玉造 功



テーブルE

松木英一郎
山根靖彦
山根季久子
鈴木裕士
平野 実
伊能敏雄
川上 清
大西道一



テーブルF

中村美代
小池美幸
河崎英一
中村律子
肥田嘉昭
野上道男
肥田文子
河崎倫代



テーブルG

楠本武之
和田麻美
和田千明
和田直子
楠本美紀
高原雄児
西川 治
西村裕司
西村真紀



テーブルH

足立 進
赤堀みさを
足立知代
中野正治
伊能昌子
石原博司
揚 三容
伊能 洋
揚 孝子



テーブルI

平田 稔
坪井隆治
前田幸子
榎本隆充
大八木照行
加賀尾宏一
中川 篤
赤井寿美



テーブルJ

久保山隆吉
中村善郎
福田里香
久保山孜子
酒井道久
中和 健
馬場良平
岡田潤一郎
中村泰子



テーブルK

桂 文子
河原林修平
桂 崇文
伊能楠雄
白井尚子
河内健斗
高宮 勲
河内善徳
井上辰男



テーブルL

渡辺貞子
新沢義博
橋本 茂
堀野正勝
坂本義親
横溝高一
蒔苗博道
蒔苗景子



テーブルM

黄川田澄子
大星正嗣
黄川田成子
村上広史
黄川田真衣
石黒信二
朝倉順子
朝倉佐江子



テーブルN

奥宮正太郎
大久保朝子
石井 洋
土器屋由紀子
大橋開智
神保弘之
庄司昭子
永野達代
木内志郎



テーブルO

宮尾昌弘
福田 仁
寺口 学
渡辺一郎
三木敏明
手銭白三郎
山本公之
寺尾承子
清水 弟



テーブルP

鈴木由生子
城石閨子
鈴川準二
中島 惇
森田蒼生
中島米子
菱山剛秀
山田浩司



テーブルQ

河野俊正
河野由紀
井上 健
井上小絵
佐々木清之助
齋藤サタ
佐々木慶宏
高安克己
佐々木弘毅



テーブルR

大西京子
大西一美
鈴木純子
北岡浩美
北岡久典
宮内 敏
奥永 渚
矢橋潤一郎
菱沼要治郎



テーブルS

秋葉和子
伊能 亮
橋本敬之
佐藤由紀
江川 洋
須賀原修二
高月 雅
川浪富士夫
詫摩祥江

テーブルU

小野公三
小野理枝
川口順子
大沼 晃
川口正志
久保田総一
中村良紀
齊藤重昭



閉会の挨拶

伊能忠敬研究会事務局長 菱山 剛秀

本日は、全国から伊能測量協力者のご子孫の方々に多数お集まりいただき、また、伊能忠敬の測量を現代に継承している国土地理院から院長の村上広史様、明治時代から伊能忠敬の功績に着目し、顕彰を続けていただいている東京地学協会から理事長の野上道男様にもご出席いただき、このように盛大に伊能忠敬没後二〇〇年の式典を開催することができました。

主催者として、改めて御礼申し上げます。

今年、江戸から明治になって一五〇年に当たりますが、日本の近代国家建設に伊能図が果たした役割は計り知れないものがあります。

国造りの最も基礎となるのが正確な地図で、国土地理院の前身である陸地測量部の沿革史の冒頭にも「明治維新文物大いに勃興し、軍事に、行政に、興業に、精確なる地図の需要、倍々急なりといえども、当時ひとつもこれに必ずべきものなし・・・」とあります。

しかし、日本には、このとき伊能図がありませんでした。伊能図を骨格として利用して当面の需要に応える地図を創ることができました。現在の国土地理院の地図でいえば、基盤地図情報に当たります。

そうした伊能図の作成にご協力いただいたご先祖の皆様は、改めて御礼申し上げます。また、本日の顕彰会開催については、数年前から、渡辺一郎名誉代表を中心に準備を進めてまいりました。

本日の運営に携わったスタッフをはじめ、お手元にお渡しした記念誌を作成した北陸支部の会員など、長期に渡り準備を進めてくれた会員の皆さまにも改めて感謝申し上げます。

本日は、本当にありがとうございました。



閉会の挨拶をする菱山剛秀事務局長

都内史跡めぐり (写真集)

四月二十二日

午前9時10分 東京駅丸の内中央口集合
午前9時30分 東京駅出発



東京駅丸の内



史跡めぐりのバスの前で



・芝公園から見上げた東京タワー



芝丸山古墳頂上の記念碑を目指して



芝公園に到着



測地遺功表の前で説明



伊能忠敬測地遺功表



見学を終えて



測地遺功表の前に集う参加者

・芝公園丸山記念碑 (伊能忠敬測地遺功表)



伊能忠敬銅像の前に集う参加者



富岡八幡宮正面入口



伊能忠敬銅像 手前の半球状のものは三角点



伊能忠敬銅像全景



銅像を作成した酒井さん



伊能忠敬銅像正面



伊能忠敬銅像左前方から



地図を見ながらバスで移動



正面は富岡八幡宮拝殿



墓地の入口



源空寺



忠敬の師 高橋至時の墓碑



伊能忠敬の墓碑



法要中焼香をする参加者



伊能忠敬の墓碑の前で法要



法要を終えて源空寺を後に



法要を終えて源空寺住職からの挨拶

伊能忠敬没後二〇〇年 記念誌

「伊能忠敬 日本列島を測る」前編・後編

序言

2018年は伊能忠敬の没後200年にあたる。

忠敬は17年に及んだ全国測量を終え、最終的な地図が作成途上にあつた文政元年（1818）4月13日（太陽暦5月17日）に73歳の生涯を終えている。しかしそれは秘されたまま、地図作成は隊員の手で続けられて文政4年（1821）に完成、忠敬の名で上呈されたのちに喪が明かされた。したがって公式の没年は1821年、実際の没年は1818年ということになる。

よく知られているように、現在広く「伊能図」と呼ばれている正確な日本図は、伊能忠敬とその測量隊の実測によるものである。一貫した方法による国土全域の実測図はこれが最初であった。日本の海岸線の形状をはじめ正確にとらえたこの地図は、幕末から明治にかけての変革の流れのなかで、新しい国土像を描くうえでの基礎資料として高く評価され、大きな役割を果たした。その業績は明治16年に正四位贈位、同22年、東京の芝公園丸山古墳上に「正四位伊能忠敬先生遺功表」が建立されたのにつづき、小学校の読本（教科書）に取り上げられるなど、広く知られるようになった。刻苦勉励の人という側面に目が注がれる一方、科学的な業績としての測量事業は科学的に説明される必要があるという提言もあり、大正6年（1917）には帝国学士院の委嘱を受けた大谷亮吉による研究書『伊能忠敬』¹が出版された。監修者で、この研究の提唱者でもあった物理学者の長岡半太郎は、序文のなかで翌大正7年が忠敬の没後100年の節目であることにふれている。この書が現在もなお伊能忠敬とその仕事についての基本図書のひとつであることはよく知られているとおりである。

ほかにも多くの個別の研究が蓄積されてきたが、没後150年には、保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』²、生誕250年には、東京地

学協会編集『伊能図に学ぶ』³が出版されるなど、節目を期してそれまでの研究の集大成や展望がまとめられている。

本書は「伊能忠敬研究会」による「伊能忠敬没後200年記念事業」の一環である。

「伊能忠敬研究会」は、1995年11月に千葉県佐原市（現香取市）でおこなわれたフランス伊能中図里帰り展を契機として設立された研究団体で、これまで、発起人の渡辺一郎氏（現名誉代表）を中心に、現在国宝指定を受けて香取市の伊能忠敬記念館に収蔵されている伊能忠敬関係資料の精査、各地、各機関に埋もれた伊能図の諸種の写本や、地域史料の発掘、研究とともに、「伊能忠敬展」（江戸東京博物館）、「伊能ウォーク」（日本ウォーキング協会・朝日新聞社共催）、原寸大の複製パネルによる「完全復元伊能図全国巡回フロア展」（28会場）などの普及活動をおこなってきた。

研究会誌『伊能忠敬研究』は現在84号に達しており、史料探究の足跡や全国に広がる会員の、現地ならではの報告など、従来のアカデミックな研究の蔭に潜みがちな成果が豊かに蓄積している。そこで、当会による「伊能忠敬没後200年記念誌」としての本書は、全国をめぐった測量隊の足跡に光をあてることを企画の柱とした。これまでの会誌に掲載された会員の研究成果が本文記事の随所に取り入れられている。

第1次から9次まで、合計3660日余りの測量行程は、欠かさずに記録された「測量日記」28巻⁴によって知ることができる。測量隊の人数は時期により5人から19人であるが、測量先の各地では手伝いや宿泊などに膨大な地元の人びとの協力があつた。「測量日記」に記録された人名は1万4千名におよぶという。測量隊への対応を記録する地域史料の数も多く、測量の実行にかかわる記述が中心の「測量日記」を補完する測量隊の様子や受け入れ側の苦労などがよみとれる。

本書の特色は、測量日記、書状や各地の文書、旧道、史跡、伝承などからわかる測量隊の足跡を都道府県別にまとめていることである。これまでも測量の経路についての詳しい記述は多いが、いずれも測量の回次ごとに経路を追っている。しかし、特に測量が幕府事業となった後半、西日本の測量においては、内陸の往還も網の目のように測るため、現在の県・郡といった地域単位でみると回次の違う測量コースが入り組んで

いる場合が多い。兵庫県の場合を例にとると、第5・6・7・8次の測線（測量コース）が通っている。現在の地域単位での測量がどのように進んだかを知るためには、各次の該当箇所を拾って総合しなければならず、不慣れた読者には厄介であった。測量コースや測量隊の記念碑などを探訪する手がかりとしても、地域単位の測量進行の全体像を一目で把握できる資料は有用であろうと考える。

固い研究書ではなく、測量の進行や、測量コースの比定、記念碑、地域でのエピソードなど、生身の伊能測量を、地域別にわかりやすくまとめて紹介することをめざしている。本書が、思いがけず身近に存在する伊能忠敬や測量隊ゆかりの地を知り、学習を深めるためのよすがともなれば幸である。

記念碑・案内板、宿舍情報、史料や文献の所在などについては、各地の自治体にも照会し、多くの機関から多大な協力をいただいた。本書収録の記念碑・案内板一覧表は194件に及んでいる。各自治体担当者の皆様には、記して深く感謝を申し上げます。

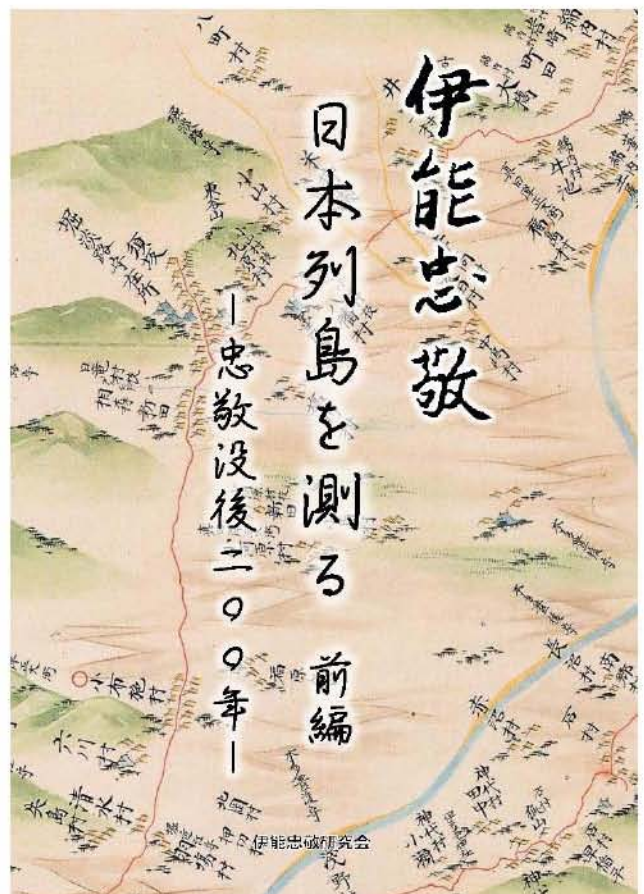
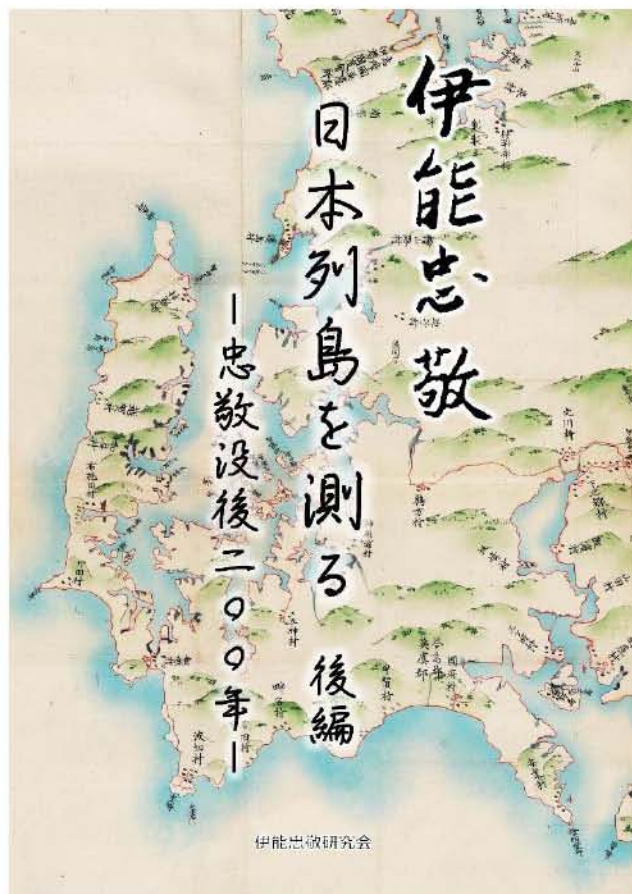
また、河出書房新社には『伊能図大全』収録画像等の使用について随所使用の許諾をいただいた。併せて感謝申し上げます。

2018年4月13日

伊能忠敬研究会代表

鈴木純子

- 1 大谷亮吉著『伊能忠敬』岩波書店 1917
- 2 保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』古今書院 1974
- 3 東京地学協会編『伊能図に学ぶ』朝倉書店 1998
- 4 伊能忠敬の測量日記には、測量実施中に書いた51冊（「忠敬先生日記」とよばれる）と、のちの忠敬自身による浄書本28冊（「測量日記」と呼ばれる）の2種がある。いずれも伊能忠敬記念館蔵、国宝。



(前編)

口絵
序言
もくじ

第1章 伊能忠敬の人と業績

1 伊能忠敬の実像を求めて

星埜由尚

2 伊能測量の概要

測量行程図

渡辺一郎

測量次別参加隊員・経歴

河崎倫代

3 伊能忠敬の測量

菱山剛秀

4 伊能図の世界

鈴木純子

第2章 伊能忠敬が歩いた日本

1 東日本編

北海道・青森県・宮城県・岩手県・福島県・秋田県・山形県・茨城県・埼玉県・栃木県・群馬県・千葉県・東京都・神奈川県・新潟県・山梨県・静岡県・富山県・石川県・福井県・長野県・愛知県・岐阜県

コラム

伊能家の記憶1

伊能家の記憶2

(後編)

もくじ

第2章 伊能忠敬が歩いた日本

2 西日本編

和歌山県・三重県・滋賀県・京都府・大阪府・奈良県・兵庫県・岡山県・広島県・山口県・島根県・鳥取県・徳島県・高知県・愛媛県・香川県・福岡県・宮崎県・鹿児島県・熊本県・佐賀県・長崎県・沖縄県

第3章 全国記念碑・案内板等めぐり

3 伊能忠敬関係記念碑・案内板等一覧

第4章 資料編

1 伊能忠敬関係系図

2 伊能忠敬と伊能測量関係年表

コラム

伊能家の記憶3

富士山

あとがき

伊能忠敬没後二〇〇年 記念誌「伊能忠敬 日本列島を測る」前編・後編 に掲載の都道府県別行程図は、デジタル伊能図(c)東京カートグラフィック 2015、

(c)河出書房新社 2015) データの使用許諾を得て作成した。この行程図を使用する場合

1. 伊能忠敬研究会の許諾を得ること

2. 「デジタル伊能図(c)東京カートグラフィック 2015、(c)河出書房新社 2015)」を表示すること

あとがき

「伊能忠敬没後200年記念誌」出版を思いついたのは、伊能忠敬研究会総会に出席した帰路、ほくほく線はくたか号の車中でした。手帳をめくってみて、それが2013年6月だったことを知り、5年近い歳月の経過に驚いています。

当初思い描き、会員の皆様に提案していた内容とはかなり違ったものになりましたが、「都道府県ページ」と「全国伊能研究碑・案内板等めぐり」の2本立てにした、他の伊能本にはない特色を出せたと思っています。

この4年余り、伊能測量隊が宿泊した全国自治体に、伊能忠敬関係記念碑・案内板、資料等の有無を問合せ、多大な協力をいただきました。その成果がこの記念誌に結実しています。篤く御礼申し上げます。今後、本書が教育現場や生涯学習の場に活用されて、伊能忠敬と測量隊の業績を身近に感じていただきたききっかけになれば幸いです。さらにその実績は、測量先の多くの人々の多大な協力なしにはあり得なかつたものです。本書にはそのような場面を記述した箇所も多々あります。郷土の歴史に誇りを持って読み進めていただければ、本書を企画した者として、こんな嬉しいことはありません。

企画・編集のほとんどは石川県支部会員のチームワークによるものです。特に、室山孝会員、寺口学会員には最後の最後まで、執筆・編集作業に尽力していただき、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

また、渡辺一郎名誉代表、星埜由尚特別顧問、鈴木代表理事、菱山剛秀事務局長、前田幸子元編集長には、執筆・編集・資料提供に力強いご支援をいただきました。会員諸氏の長年の研究成果を随所に活用・引用させていただき、本書が成り立っていることも、感謝の気持ちとともにご報告させていただきます。

最後になりましたが、河出書房新社様には『伊能大全』（2013年11月刊行）の使用をご許可いただき、本書の特徴を存分に出すことができましたことを、深く感謝申し上げます。

河崎倫代

記念誌 正誤表

印刷終了後、図版や文章の一部に誤りや不正確な記述が発見されたので訂正します。

顕彰会後にお届けしたのものには、訂正資料を添付しましたが、顕彰会でお配りしたのものには訂正資料がありませんでしたので、左記により訂正いただきますようお願いいたします。

後編 24ページ「兵庫県」と72ページ「鹿児島県」の地図に誤りがありましたので訂正します。

兵庫県

摂津・播磨・丹波・但馬・淡路



3「伊能忠敬像」



195「伊能忠敬休憩之地」



196「伊能忠敬測量宿泊跡地」



秀蔵書状



鹿児島県 薩摩・大隅

【追加】後編 p 94~111「全国の記念碑・案内板等」

3 銅像「北海道測量開始記念碑 伊能忠敬像」完成(2018年4月27日除幕式)

195 記念碑「伊能忠敬休憩之地」設置場所：長崎県東彼杵郡東彼杵町口木田郷 962-2 川口家
設置：平成 28 年 9 月 設置者：川口正志・順子

196 石柱「伊能忠敬測量宿泊跡地」設置場所：岐阜県下呂市湯之島 554 (かえる神社境内)

【訂正】 設置：平成 30 年 5 月 17 日 設置者：下呂・伊能忠敬測量来訪顕彰事業実行委員会
・前編 p 19 2 段目「角谷清次郎」→「門谷清次郎」、「第 5・9・10 次に参加」→「第 5・8・9 次に参加」

「第 9・10 次では天文方下役」→「第 8・9 次では天文方下役」

・ p 38 2 段目「(明治 9 年、東西 2 枚セット)」→「(明治 9 年、東西 2 枚セット、図 6)」

・ p 40 「行程図」中の「シャマニ (様以)」→「シャマニ (様似)」

・ p 86 旧国名「神奈川県 相模」→「神奈川県 相模・武蔵」

・ p 86 「行程図」中の「双子村」→「二子村」、「横浜村」→「本牧本郷村」

・ p 97 1 段目「(横花開港記念館蔵)」→「(横浜開港資料館蔵)」

・ p 113 大図「常神半島」中の「方丈山」→「万丈山」

・ p 117 1 段目「標高 1672m ので昼食」→「標高 1672m の野麦峠で昼食」

・ 後編 p 8 旧国名「三重県 伊勢・志摩・伊賀」→「三重県 伊勢・志摩・伊賀・紀伊」

・ p 35 「再現された昼食」は「越後国岩船町年寄 伴田与惣左衛門家の夕食(前編 p 91)を再現したものである

・ p 38 写真「秀蔵書状」の左右を入れ替える

・ 43 3 段目「日本地理測量之図」→「日本国地理測量之図」

「…中央に描かれた 863,000 分の 1 の伊能小図…」→「…中央に描かれた伊能小図…」

・ p 72 鹿児島県行程図の差し替え (屋久島・種子島は第 8 次測量)

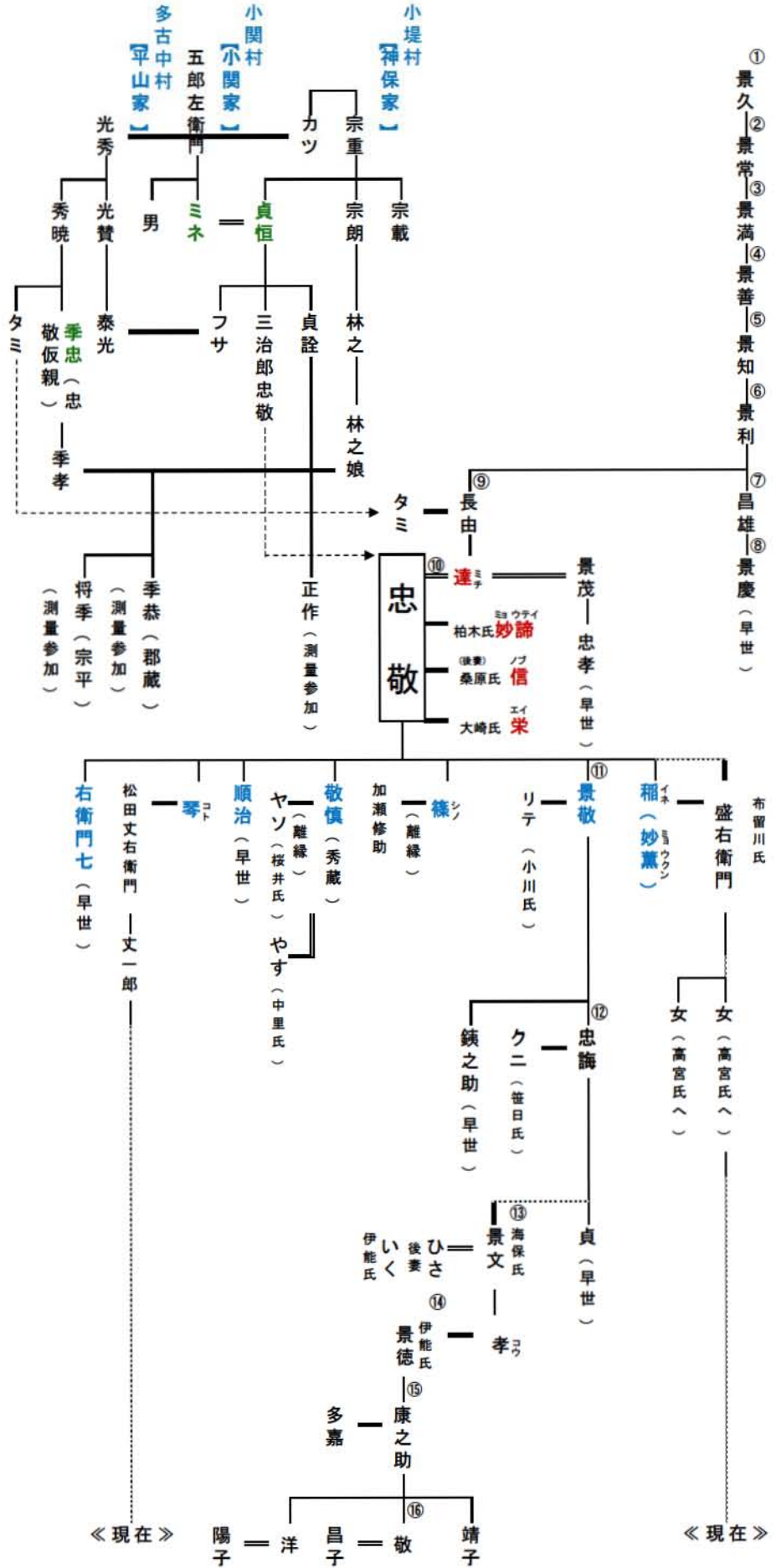
・ p 84 「行程図」中の「竹田津村」→「高田村」

・ p 115 「間宮林蔵大坂に生まれる」→「間宮林蔵生まれる」

後編 114 ページ 「伊能忠敬関係系図」を左記のものと差換え

伊能忠敬関係系図
(後編)

佐原村
伊能家



伊能測量協力者顕彰大会の記録

小野公三

顕彰式

2018.4.21

東京学士会館で「伊能測量協力者顕彰大会式典」が開催された。私の祖先がたまたま二〇〇年余り前に、伊能忠敬測量隊の一行を測量の現地であった播磨国明石領(兵庫県明石市)で宿泊・調査に協力したとのことで招待を受け、家人とともに参加させていただいたのである。私と同様の伊能測量協力者の子孫が約一二〇名、伊能忠敬研究会会員の方が六〇名、合計一八〇名の参加者があった。北海道から九州まで全国からの多数の参加である。



伊能忠敬研究会名誉代表 渡辺一郎さん

冒頭に伊能忠敬研究会理事の島根大学名誉教授高安克巳氏の開会挨拶があった。



高安克巳氏の開会挨拶

続いて伊能忠敬研究会榎本隆充氏から顕彰の辞があった。榎本隆充さんは、榎本武揚の曾孫だそうである。榎本武揚の父は箱田良助といって、漢詩人として高名な菅茶山に師事したのち伊能忠敬の門弟となり、各地の測量に同行して伊能忠敬の死後「大日本沿海輿地全図」を完成させた人々のひとりである。

続いて伊能測量協力者に対して感謝状が、伊能忠敬研究会代表理事鈴木純子氏から贈呈された。

感謝状は伊能忠敬が全国を測量行脚したときの二〇〇年前の人たちに宛てられ、それを代理とし

てわれわれ子孫が受け取るのである。

国土地理院長村上広史氏から来賓祝辞があり、感謝状を受け取った側の代表として幕府蒞山代官子孫の江川洋氏から挨拶があった。

最後に伊能忠敬研究会名誉代表渡辺一郎氏から主催者御礼挨拶があった。渡辺一郎さんはかつてNITに技術者として勤務したが、退職後ウーキングを通じて伊能忠敬を知り深く魅せられ、伊能忠敬研究会を創設されたという。たまたま歩幅が六十九センチメートル余りで伊能忠敬と全く同じであったとおっしゃる。八十八歳とのことだが、頭脳も発声もとても若々しいのに感心した。

懇親会

2018.4.21

顕彰式典のあと、会場を移動して懇親会が開催された。

鈴木純子代表理事による冒頭の開会挨拶のあと、東京地学協会会長野上道男氏から祝辞があった。伊能忠敬の測量・地図にかんする業績はもろろん偉大なものであるが、彼の詳細かつ綿密な日誌の記録から、さまざまな貴重な情報が得られるとのことである。たとえば明治維新期の廃仏棄釈により多数の寺院が一次的にも廃棄・停止され、近世の神仏習合時の神社と寺院の関係などが不分明になった場合が多々発生したが、伊能忠敬の日誌には、測量で訪れた地の神社や寺院のことまでも詳細に記されていて、貴重な基本情報となっているそうである。その日誌に、たとえば私の祖先に関するのは「文化二年(一八〇五)一〇月九日、朝晴六つ時過ぎ西須磨村を立、(中略)明石大蔵谷駅へ午時頃に到着、摂津・播州境(中略)垂水村にて大庄屋兵治郎出て大蔵谷駅、すなわち明石城下に

止宿」と記されている。簡潔な業務日誌であるが、要を得た行き届いた記述である。



八名ずつ円卓に着席してフランス料理をいただく。私と家人の隣には伊能忠敬研究会の会員の方がおられて、研究会の活動について話を聴くことができた。藤沢にお住まいとの由で、私たちもかつて十八年間近く鎌倉に住んだことから、湘南地域の話でも盛り上がった。遠江国（静岡県）榛原郡の名主の子孫の方、肥前国（佐賀県）鹿島領に居住されていた方の子孫の方、肥前国（長崎県）大村領郷土の子孫の方など、さまざまな地域の方々とお話しする機会があった。

記念落語会

懇親会の会食を終えると、学士会館からバスで内幸町ホールへ移動した。

「伊能忠敬歿後二〇〇年記念 伊能測量協力者顕彰大会落語会」として「立川志の輔 独演会」が催された。立川志の輔師匠は、昭和二十九年（一九五四）生まれの六十四歳、明治大学を出たのち、俳優、サラリーマンなどを経て、二十九歳のとき立川談志に入門、立川一門の落語協会脱退などの波乱万丈を経て、NHKテレビの「ためしてガッテン」などでも有名な落語家・マルチタレントである。

志の輔さんは、一〇年余り前に偶然千葉県香取市佐原の伊能忠敬記念館に立ち寄ったとき、記念館会場の最初のコーナーの映像案内で、現代最新技術による航空写真をベースとする日本全図が現れ、続いて伊能忠敬が二〇〇年前に作った伊能地図が重ねられると、驚くべき一致が示されて、その正確さに感動した、という。そうして興味をかき立てられて会場に入っていくと、当時の簡素な国産の器械が展示されていて、よくもこんな簡単な道具だけでこれだけ素晴らしい地図を描けたものだと感動を深くしたという。しかもこの偉業の開始が、「なんとかして地球の寸法を測りたい。そのために緯度一度がはたして地球の表面でいかほどの寸法なのか知る必要があり、そのためには江戸から蝦夷まで歩測と天体観測で正確に計測する必要がある」という問題意識であったことに、またまた感動した、という。二〇〇年も前の市井の人が、そこまで理知的で科学的であったこと、五十歳をすぎても旺盛な意欲と行動力に深く感銘した。と。

そのあと、なんとか伊能忠敬を題材に新しい落語を創作したいと、さまざまに情報を収集し勉強し、数年の歳月を経てやっと『大河への道』伊能忠敬物語』を完成した、との前話があった。一時半の長時間を休憩なしのぶっ通しで話さる、演劇的要素のある教養落語である。声も素晴らしいし、間の取り方、ときどき挿入する笑いのツボなど、さすがに高名な真打の面目躍如の高座であった。



ひとりの知的で才能豊かな落語家が、偶然の機会に伊能忠敬という二〇〇年前の人物の偉業に、さらにその仕事への姿勢に感動し、それを契機として長い時間をかけて貴重で魅力的な落語を新たに創作した、というところに、私たちは感動した。

立川志の輔 独演会

伊能忠敬歿後二〇〇年記念
伊能測量協力者顕彰大会 落語会

日時：平成三〇年四月二日
午後二時開演 五時半閉演
会場：内幸町ホール

伊能忠敬史跡探訪と二〇〇年法要 2018.4.22

伊能測量協力者顕彰大会の行事としてバスで東京都心部の伊能忠敬ゆかりの地を訪れ、そのあと上野源空寺で伊能忠敬二百年法要に参列することになった。

芝公園の伊能忠敬測地遺功表

朝、東京駅で集合して出発した二台のバスは、港区芝公園に着いた。ここには「芝丸山古墳」の前方後円墳のうちの円状の山にあたり、少し坂道



伊能忠敬測地遺功表

を登る。東京タワーのすぐ下付近にあたり、都心なのに緑ゆたかで静寂な山道風の小道である。数十人で見学するので、登り道はすくいっぱいになる。頂上に着くと、正面に伊能忠敬の業績を顕彰する「伊能忠敬測地遺功表」がある。

最初は明治二十二年（一八八九）東京地学協会が、高さ八・六メートルの青銅製の角柱として、伊能忠敬の功績を顕彰する遺功表を建てた。しかしさきの大戦中の昭和十九年（一九四四）軍需物資として金属回収策がとられたときに撤去されてしまった。戦後もようやく落ち着いて東京オリンピックも終えた昭和四〇年（一九六五）、現在の形に再建された。

伊能忠敬がつくった地図の日本列島全体がレリーフ彫刻されているが、興味深いのは、間宮林蔵が測量し伊能忠敬が測量したわけでない北海道の北部については、海岸線が破線で描かれている。ここからは、東京タワーを見上げ、芝公園や増上寺境内を見下ろすことができる。私は首都圏に住んでいたころを含めて、何度も増上寺近辺には足を運んだが、こんな丘と記念碑があることはまったく知らなかった。

富岡八幡宮の伊能忠敬銅像

バスが深川の富岡八幡宮に着く。昨年十二月、この神社の女性宮司が実弟に日本刀で切り殺されて、犯人の弟が内縁の妻とともに自殺するという、神社に相応しくない凄惨な事件があった現場でもある。今年の正月は、さすがに参拝客が激減したと報道があったが、私たちが訪れた日は骨董市が開催されていて、なかなか賑わっていた。



富岡八幡宮境内

この神社の正面鳥居を入って間もなく、参道脇に伊能忠敬の銅像がある。平成十三年（二〇〇一）除幕式を行った新しい銅像である。式典には映画「伊能忠敬―子午線の夢」で忠敬翁を演じた加藤剛、妻・お栄役の賀来千香子らが役柄の扮装のまま駆けつけ、地元の数矢小学校の児童たちとともに除幕を行なったという。



伊能忠敬銅像

伊能忠敬研究会のメンバーでもある彫刻家酒井道久さんが私たち一行に参加しておられ、銅像建立のエピソードを聴くことができた。この銅像は、シチュエーションとしては、伊能忠敬が全国測量の最初の旅に出るとき、この富岡八幡宮に旅の安全と事業の成功を祈願して、さあ出かけるぞ、という場面である。それは伊能忠敬が五十五歳のときであったが、銅像としてはもう少し円熟・老成した六十歳過ぎころの相貌としたという。伊能忠敬の肖像画として残っているものはもつと晩年のものであり、頬もこけていささか力強さに欠けるので、酒井さんは子孫の何人かに面談して、容貌のヒントを得ようとした。しかしさすがに六く七代も下ると、容貌もほとんどわからなかったそうである。それでも、頬の骨が高く、鼻筋がしっかりとっているなど、一部のポイントを把握して制作したという。

伊能忠敬研究のメンバーでもある彫刻家酒井道久さんが私たち一行に参加しておられ、銅像建立のエピソードを聴くことができた。この銅像は、シチュエーションとしては、伊能忠敬が全国測量の最初の旅に出るとき、この富岡八幡宮に旅の安全と事業の成功を祈願して、さあ出かけるぞ、という場面である。それは伊能忠敬が五十五歳のときであったが、銅像としてはもう少し円熟・老成した六十歳過ぎころの相貌としたという。伊能忠敬の肖像画として残っているものはもつと晩年のものであり、頬もこけていささか力強さに欠けるので、酒井さんは子孫の何人かに面談して、容貌のヒントを得ようとした。しかしさすがに六く七代も下ると、容貌もほとんどわからなかったそうである。それでも、頬の骨が高く、鼻筋がしっかりとっているなど、一部のポイントを把握して制作したという。

浅草天文台跡

バスが芝公園を出て富岡八幡宮に向かうその途中に、伊能忠敬終焉の地とされる「地図御用所」の跡（中央区日本橋茅場町二丁目）を通り、そのあと富岡八幡宮から法要の行われる源空寺に向かう途中に台東区浅草橋三丁目の「浅草天文台跡」（天文方御用屋敷）を通る。いずれも大勢の人がバスから出て見学できるような場所ではないので、バスの窓から史跡の説明板をみることになる。

天文台は、司天台（してんだい）、浅草天文台などと呼ばれ、幕府の天文・暦術・測量・地誌編纂・洋書翻訳などのための施設であった。天明二年（一七八二）、牛込の薬店（わらだな）（現、新宿区袋町）から移転された。正式の名を「頒曆所御用屋敷」という通り、本来は暦を作る役所「天文方（てんもんがた）」の施設であり、正確な暦を作るために天体観測を行ったのである。

その規模は、『司天台の記』という史料によると、周囲約33.6m、高さ約9.3mの築山の上に、約5.5m四方の天文台が築かれ、四十三段の石段があったという。別の資料『寛政暦書』では、石段は二箇所に設けられ、各五十段あり、築山の高さは9mだったという。



浅草天文台跡

幕末に活躍した浮世絵師、葛飾北斎の『富嶽百景』のなかの「鳥越の不二」には、背景に富士山を、手前に天体の位置を測定する器具「渾天儀（こんてんぎ）」を据えた浅草天文台が描かれている。この浅草天文台は、天文方高橋至時（よしとき）

この浅草天文台は、天文方高橋至時（よしとき）

らが寛政の改暦に際して天体観測した場所であり、この至時の弟子のひとりに伊能忠敬がいた。伊能忠敬は、全国の測量を開始する以前に、深川の自宅からこの天文台までの方位と距離を測り、地球の緯度一分の長さを求めようとした。そして師の高橋至時から、精度上この距離では短すぎることを指摘され、江戸から蝦夷まで旅に出ることになったのが伊能忠敬のはじまりであった。高橋至時の死後、父の跡を継いだ景保（かげやす）の進言により、文化八年（一八一二）、天文方内に「蕃書和解御用（ばんしよわけごよう）」という外国語の翻訳局が設置された。これは後に洋学書、藩書調所、洋書調所、開成所、開成学校、大学南校と変遷を経て、現在の東京大学にいたったのである。

天文台は、天保十三年（一八四二）、九段坂上（現、千代田区九段北）にも建てられたが、両方とも明治二年（一八六九）に新政府によって廃止された。

上野源空寺での伊能忠敬歿後二〇〇年法要

バスは浅草寺近くを経て上野に至り、「伊能忠敬歿後二〇〇年法要」が執り行われる源空寺に着く。この日は四月下旬に入ったばかりというのに、最高気温が二十八度を超える夏日となった。それでも湿度が十分低かったのか、さほど汗をかかずに過ごすことができたのは幸いであった。

源空寺は、正式には五台山文殊院源空寺という浄土宗の寺院である。戦国末期の天正十八年（一五九〇）、佐竹氏の一族であった道阿霊門上人が湯島に草庵を結んだのを開祖とする。浄土宗を信仰した徳川家康が帰依し、慶長九年（一六〇四）寺領・堂宇・寺院名を与えたのが創建とされている。



明暦三年（一六五七）の江戸大火で焼失し、現在の場所に再建された。その後も戦禍・震災・火災でなんども焼失し、再建されている。

法要は屋外の伊能忠敬のお墓の前で執り行われ、伊能忠敬関係者一同が順番に参拝・焼香した。

源空寺の墓地・高橋至時の墓

法要が行われた源空寺の墓地には、伊能忠敬のほかにも何人かの著名人が祀られている。

伊能忠敬の師であった高橋至時の墓が、伊能忠敬の墓の近くにある。高橋至時は、明和元年（一七六四）大坂に大坂定番同心の子として生まれた。利発な子であった至時は、青年期から算術を松岡能一に、暦学を麻田剛立に師事した。至時は同門の間重富とともに天文学・暦学を研鑽して、寛政七年（一八九五）、江戸に召喚されて幕府天文方と

なり、当時採用されていた精度の悪い宝暦暦を改暦することを命ぜられた。至時は、間重富などの仲間とともに、輸入された当時最新の書物を通じて太陽系の惑星軌道がケプラーの説くように楕円軌道であることまで理解するなど、当時の最先端の天文学者であった。これらの勉学と研究は、のちに寛政暦として結実した。

その間、寛政七年（一七九五）ころ、十九歳年長の伊能忠敬が彼の下に入門してきたのであった。



伊能忠敬はまるい地球の寸法に関心をもち、そのために緯度一度に相当する子午線弧長を求めたいと言った。それは至時の関心事でもあった。伊能忠敬は深川の自宅から浅草の天文台までの距離を歩いて測量し、その値をもとに大まかな値を求

めてみたが、至時はそのような短い距離で求めても意味がないとし、正確な値を求めるならば、江戸から蝦夷ぐらいまでの距離が必要だと教えた。これがきっかけとなって伊能忠敬は蝦夷測量を實行し、さらに日本全国の測量へと発展していった。至時は蝦夷地測量に当たって幕府に許可を得たり、測量中に問題が起こった時には忠敬に助言を与えたりするなど、さまざまな形で測量事業を支援した。

源空寺の墓地・幡随院長兵衛夫妻の墓

幡随院長兵衛は、唐津藩の武士塚本伊織の子として、江戸時代前期の元和八年（一六二二）生まれたとされるが、渡辺党松浦氏の一統で滅亡した波多氏の旧家臣の子であるとされる説や、幡随院（京都の知恩院の末寺）の住職向導の実弟か、または幡随院の門守の子とする説もあるらしい。



幡随院の住職向導に私淑し、江戸に出て浅草花川戸に住み、武家に奉公人を斡旋する口入れ屋を営んだ。口入れ屋の娘さんを女房にした。

当時の江戸は、町奴と呼ばれる任侠の徒が横行し、また大小神祇組という旗本奴も市街を乱していた。やがて長兵衛は町奴の頭領となつて旗本奴の頭領水野十郎左衛門（水野成之）と激しく張り合うようになった。そんななか、若い者の揉め事の手打ちを口実に水野十郎左衛門に呼び出されて謀殺されたと伝える。没年や日時は諸説あるが、三十歳代で殺されたと推測されている。

歌舞伎の登場人物として広く知られ、芝居『極付幡随長兵衛』の筋書きでは、長兵衛はこれが畏であると感じていたが「怖がつて逃げた」とあつちやあ名折れになる、人は一代、名は末代」と啖呵を切つて、殺されるのを承知で単身水野の屋敷に乗り込んだとする。果たして酒宴でわざと衣服を汚されて入浴を勧められ、湯殿で刀もなく裸でいるところを水野に襲われ殺されたとしている。

源空寺の墓地・谷文晁の墓

谷文晁は、御三卿田安家の家臣谷麓谷の子として江戸時代後期の宝暦十三年（一七六三）、江戸に生まれた。

父の友人であつた狩野派の加藤文麗から絵を学び、十八歳の頃には中山高陽の弟子渡辺玄対に師事した。二十歳のとき文麗が歿したので北山寒巖につき北宋画を修めた。その後も狩野派を学び、大和絵では古土佐、琳派、円山派、四条派などを、さらに朝鮮画、西洋画までも学んだ。二十六歳の時長崎旅行に出て大坂の木村兼葭堂に立ち寄り、鉏雲泉から南面の指南を受けた。長崎に着いてか

らは張秋谷に画法を習つた。こうして広く学んだ諸派を折衷し、南北合体の画風を目指し、またその画域は山水画、花鳥画、人物画、仏画にまで及んだ。画様の幅も広く「八宗兼学」とまでいわれる独自の画風を確立し、後に関東南画壇の泰斗となった。



谷文晁墓

また、父の谷麓谷も漢詩人として名を知られていて、文晁は文才をも持ち合わせ、和歌や漢詩、狂歌などもよくした。菊池五山の『五山堂詩話』巻三に、文晁の漢詩が掲載されている。門人には、渡辺崋山、立原杏所、高久靄厓（たかくあいがい）などがある。



史跡めぐりと伊能忠敬墓前法要を終え東京駅に戻った参加者

伊能測量協力者顕彰大会に参加して（御子孫）

第一次測量

（静岡県御殿場市） 蒔苗博道

人の縁の不思議とありがたさを伊能測量協力者顕彰大会に参加して強く感じていきます。

私は今回、陸奥国野辺地の回船問屋島谷清吉の子孫として感謝状をいただきました。島谷家に残る年譜には蝦夷測量の時に伊能忠敬が来泊したという記述があり、伊能忠敬が残した図に記された天測地と現在の島谷家の位置は極めて近いところにあります。

ただし、残された記録と史実とは若干のずれがあり、その誤差の理由を研究会の戸村茂昭さんにメールでお尋ねしたのが、その後、戸村さんいろいろと教えを乞うことになるきっかけとなりました。それがご縁で今回、顕彰大会にご招待いただき、たいへん貴重な経験をさせていただきました。

蝦夷測量の際に天測が野辺地で行われていたことは知っていましたが、懇親会の席で伊能忠敬研究会の横溝高一さんにお話をうかがうことで、野辺地は単なる通過点ではなく、天測の拠点としての意味を持つ土地であったことを知ることができました。伊能忠敬の偉業の背景には、北の脅威から日本を守るといふ時代の要請があり、

そのスタートにおいて自分と関わりのある土地が特別な意味を持つ土地であることを知ることができたのは、たいへん嬉しいことでした。結果的に伊能図の作成で有名になる伊能忠敬ですが、原点には天測への関心があつたことを私たちはもつと意識すべきだと思います。その意味で伊能忠敬に影響を受けてご自身が天体観測に関心を深めたという、懇親会での戸村さんのスピーチもたいへん意義深いものだったと思います。

野辺地は、伊能忠敬の偉業達成の歴史のスタート地点において重要な意味を持ちましたが、その偉業の歴史の終着点においても野辺地ゆかりの人物が関わりを持ちました。その人物とは最上徳内です。野辺地滞在時に島谷家に身を寄せたことが縁で島谷ふでと結婚した徳内はシーボルト事件に関係を持ちながら、重罪を免れます。一方、高橋景保は罪を問われ斬首ということになりました。立川志の輔師匠の『大河への道〜伊能忠敬物語』は我が生涯で聴いた落語の中で最も素晴らしいものでしたが、高橋景保が話の中心となるクライマックスは息をのむ素晴らしさでした。師匠演じる景保が「私の隣りに伊能忠敬がいる」と語る場面で、その存在を志の輔師匠の隣

りに確かに感じる事ができたのは、大きな驚きでした。顕彰式と懇親会を経て落語を聴き史跡めぐりと法要でしめくくられた今回のプログラムは、伊能忠敬についての知識を深めるだけでなく、参加者それぞれの心の中に伊能忠敬を新しく生まれ出でさせる素晴らしいプログラムであつたと感じていきます。これからも伊能忠敬の誠実な愚直さに学び続け、good jobと自己評価できる仕事をしていきたいと心を新たにしました。



現代の地図を重ねたものです。

配布された貴重な資料の数々、懇親会の美味な食事、聴きごたえのあるスピーチ、きれいに印刷されたバスの配車チケットに至るまでの万事に行き届いた会の運営、忠敬の姿をかたどつた菓のプレゼント、感動させられたお心遣いのあれこれこれは枚挙にいとまがありません。

日本の歴史上、稀にみる会となつた伊能測量協力者顕彰大会を企画・運営してくださった皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

第二次測量

（千葉県市川市） 加藤浩也・真理

先日は大変素晴らしい式典及び懇親会にお招き頂き、御礼申し上げます。主人いわく、「祖母が生前の時にそのような話を聞いてはおりましたが、まさか日本でも有名な歴史的人物が加藤家に？」しか思っておりませんでした。

この度、伊能忠敬様という偉大な方に我々の先祖が関わっていたご縁で名誉ある式典にご招待され、先の事もあり大変感慨深い思いを致しました。改めて私達の先祖を思い起こし大変嬉しく存じます。

我々も少しでも皆様の為になることがあればという事を肝に銘じて日々過ごして参りたいと思えます。本当に素晴らしい機会に出会えた

事を深く感謝申し上げます。

(岩手県陸前高田市) 黄川田澄子

この度、伊能忠敬様の没後二〇〇年にあたり、お招きいただき、ありがとうございました。このような立派な会に出席できたことを光栄に存じます。伊能様が我が家に宿泊されたことを初めて知ったのは、私が嫁いで間もない頃でした。

菩提寺に伺った際に和尚様から「伊能忠敬さんが泊まったことをご存知ですか。」と聞かれ、今は亡き夫と義母に確かめると、その通りだと返事。そして、土蔵の長持の中に伊能様に使っていただいた夜着がしまつてあるとのことでした。伊能様が宿泊された当時の母屋は、一三〇年ほど前に火災に遭って失われましたが、幸い土蔵は残っていたのです。

夜着がたいへん貴重なものだというので、伊能様を当時案内した検断の子孫である宮城秀次先生のお世話で、陸前高田市立図書館や地域の公民館等で展示していただいたこともありました。

宮城先生のご紹介で、戸村様ご夫妻がはるばる陸前高田までおいでになったときは、びつくりするやら、熱意に感心するやら……。さらに、測量協力者の子孫を東京に招待してくださるというありがたいお話を頂戴し、思い切って参加させていただいた次第で

す。八〇歳という高齢で、どうなることかと心配でしたが、一緒に行った娘や孫、それに東京に住んでいる義妹にも世話になり、無事に一泊二日の旅をすることができ、ほっとしております。

この二日間は、本当に夢のようでした。歴史を感じる学士会館での晴れやかな顕彰式と、豪華なお食事。テーブルで、一緒にした国土地理院の院長さんをはじめ、いろいろな方に声をかけていただきました。夜に行われた落語会は、なんと最前列での観覧。いつも「ガッテン」で観ている志の輔師匠が、目の前で熱演される姿に感激いたしました。翌日の東京観光をしながらの史跡巡りと源空寺での法要も、とても心に残るものになりました。

旧家に嫁いで苦労もたくさんありましたが、今回の出来事は、今まで私なりに頑張ってきたことに対するご先祖様からのご褒美かなと思います。改めて、偉業を成し遂げられた伊能忠敬様と、我が家のご先祖様、そして、この会を企画・運営してくださった皆様に感謝したいと思います。最後になりましたが、戸村様には、たいへんお世話になりました。

本当にありがとうございました。
(岩手県盛岡市) 須賀原修二
先日の憲章大会はとても楽しいものでした、御礼申しあげます。
社会の教科書に載り、世界が尊敬す

る日本人として挙げられている伊能忠敬先生の没後二〇〇年の記念式にお招き頂きまして有難うございました。身に余る光栄です。

意匠の凝らされた式典に参加させて頂き大変恐縮致しております。私の地元岩手県沿岸では測量憲章碑が三ヶ所において鎮座し、水平線の彼方を望んでおります。これらの貴重な碑は皆で後世に伝え残して行くべきと強く感じる所存です。よい思い出を有難うございました。

第三次測量

(新潟県村上市) 伴田孜・美智子
先日は伊能忠敬没後二〇〇年顕彰大会に出席させていただき大変ありがとうございました。

今回出席させていただき、一層伊能忠敬の偉大さを知ることができ感謝いたします。
また、記念誌その他たくさん資料がとて詳しく立派にまとめられ、関係各位の多大なるお力とご苦勞に対し敬意を表したいと思います。

私共測量協力者の子孫として家族をはじめ地域にも末永く伝えていかればと思っております。
帰って地元の新聞社二社に、伊能忠敬の偉大さと顕彰大会について記事にさせていただきました。
(村上新聞、岩船新聞、新潟日報)

(東京都品川区) 山本良一

昨年の六月に突然「忠敬先生没後二〇〇年記念測量協力者顕彰大会」の案内状を賜り、驚き、半信半疑の状態でしたが、封筒の裏側に手書きで「享和二年、伊能忠敬、測量橋屋に宿す」と書かれていました故にこのような事もあったのかと、半ば好奇心も有り、出席させていただきました。私は七代目になりますが、当時の橋屋は、今回の記念誌「伊能忠敬・日本列島を測る前編」(91ページ)に記されてあります。ような有様でしたが、協力させて頂き名誉なことだったと存じます。ご配慮され、具体的に事績の記された「功績感謝状」を仏壇に捧げ報告いたしました。顕彰式は多数の協力者の参列のもとに、挙行され清しし感が致すと共に、これだけ多数の子孫方へ連絡されたご努力、学術的な内容に富む資料の配布、落語、翌日の史跡めぐり等を計画・実施された伊能忠敬研究会、イノベディアをつくる会等関係者の方々に感謝、益々のご発展を祈念いたします。

なお思い出と致しまして俳句を記載いたします。
富岡八幡宮にて
若葉して「歩測の一步」の忠敬像
源空寺にて
忠敬の記念法要白躰躰

第四次測量

(富山県富山市) 城石園子

二〇一八年四月二十一日、式典が催される学士会館の赤い絨毯を踏みしめたとき、私は緊張し、深呼吸を一回して会場に向かいました。

今を遡ること、二〇〇年以上前に先祖が伊能忠敬先生にお目にかかったことが奇跡に思われ、その上、顕彰大会を開催されるお話もためらいもありましたが、この機会に史実を知りたい思いから出席させていただきました。

式典が厳かに始まり、感謝状を拝受される方のお名前を次々と読み上げられる間、伊能先生没後、五〇年、一〇〇年、一五〇年、二〇〇年とは流れ、時代は移り変わり、

本来、先祖がいただく感謝状を、平成の世に生きる子孫が受け取ることに重い責任を感じ、感慨無量の心境でした。

このような盛大な式典を企画してくださり、周到なご準備のもとに大会までにこぎつけられた伊能忠敬研究会やイノペディアをつくる会の皆さま、また、伊能忠敬家のご子孫の方々のご苦労とご尽力に感謝申し上げます、厚くお礼申し上げます。

顕彰式、懇親会で語られたお言葉の一つ一つが今も耳に残っており、志の輔さんの独演会では涙し、史跡めぐり

では忠敬先生のゆかりの地をしつかり目に焼き付けました。

お墓が高橋至時先生のお隣にあることに感動しました。

この度賜りました「先祖の事績一覽」「伊能忠敬日本列島を測る」の冊子(書物)は記念として、また、子や孫に伝える大切な資料として活用し、長く保存いたします

(富山県射水市) 石黒信二

先月は、盛大な顕彰大会に参加させて頂き、先祖への感謝状の贈与や、貴重な資料集を多数頂き有難う御座いました。感謝状を受けられた方々を代表して挨拶された幕府葦山代官御子孫の江川洋さまを眺めながら、富士山噴火後の江川家は、どうなったのかと思っていました。幕末まで葦山代官として続いたのだと知りました。

帰宅後、プログラムや記録資料に目を通し、研究会の皆様のごこれまでの精密な調査が研究成果として編集されていることがヒシヒシと感じられ、我が家の宝として大切に保管してまいります。と思いました。

また、懇親会では美味な料理とお酒を沢山頂き有難う御座いました。

その後、内幸町ホールで富山県出身の立川志の輔さんによる「伊能忠敬に関する創作落語」が行われ、私は不勉強で伊能忠敬先生が亡くなられてから〇〇年後にお弟子さん達によって「大

日本沿海輿地全図」及び「大日本沿海実測録」が完成したことを初めて知りました。

さて、私は、昨年六月三十日頃射水市新湊博物館から、今回の顕彰会の担当者の方から連絡があるが、住所・氏名を教えても良いかと連絡を頂き、承諾致しました。しかし、その後は、参加について大変迷いました。と言うのは、私の先祖信由は伊能測量隊の測量や宿泊に尽力したのでは無く、放生津町の柴屋彦兵衛宅に宿泊された伊能先生を訪ねて、天体測量を見学し、地理・天文・算学の事などを話し、翌日は四方町(富山藩の境)まで測量隊に同道し、測量道具や測量方法を勉強したと思っていました。その理由は、前年に著わした「測遠用器之巻」の最後に、追加して伊能隊のワンカラシン

(杖先羅針盤)の実測図と伊能先生の事や測量隊員名を載せていることから推測していたからです。

それでも思い切って参加させて頂き、大変良かったと感謝致しております。

(埼玉県朝霞市) 白井尚子

伊能忠敬に関して、私には、忘れられない祖父との思い出があります。

小学生だった私の教科書に「伊能忠敬、離島を除く全国を測量」と載っており、「うちの座敷に伊能様が泊まった」と聞かされてきた私は、祖父に報

告。顔色を変えた祖父は、即刻、教科書会社、著者を調べて、電話、手紙でやり取りをしていました。

正しい歴史を残し、ご先祖の偉業を子孫に伝えていかねばという、強い想いがあったのだと思います。

この度、高齢であります母(八代目)の代理として顕彰会に参加させて頂き、全国七十家族の皆様と席を同じくさせて頂き、深く感銘を受けました。さらに志の輔さんの落語で胸が一杯になりました。

私は、埼玉で大手学習塾の教室長を致しております。中学受験、高校受験と歴史の問題に「伊能忠敬」は頻出です。そのような日本の偉人と、ご先祖がたとえ一泊でも関わりをもち、その縁(ゆかり)に心震えるのでございます。

佐渡を離れて四十年近くなりますが、伊能図に浮かびあがる佐渡島は、美しく大きく、圧巻です。これを機に、いずれは古文書の勉強や佐渡の歴史研究にも携わってみたいと考えております。

百年に一度という貴重な会に参加させて頂きましたこと、心から御礼申し上げます。

第五次測量

(和歌山県太地町) 和田麻美

若葉薫る季節です。四月の顕彰大会から三週間。孫の豆台風のゴールデンウィークも過ぎ去りました。

過日は伊能忠敬没後二百年記念顕彰大会にご招待下さりありがとうございます。顕彰会では歓待下さり、研究会、事務局の方々、お一人お一人様の心をひとつにした皆様の志、努力を感じ入りました。また、立川志の輔さんの記念落語もあつという間の時間で感動、笑いの涙を流し、楽しませていただき、生まれて初めての落語に感動し、小学校で社会の時間に習った伊能忠敬さんがとても身近に感じました。

昨春秋、過去帳をめくり年代を調べ名前の確認やお墓の戒名を指でなぞりながら、このお墓が道先案内をした先祖だと判明した時には「忠敬さんのお陰です」とお墓でひとり言を言いました。そして、これを機にもっとルーツについて勉強しないとだめだと気づかされ、顕彰大会に出席させていただき、あらためて先祖を尊び、偲び、後世に伝えていかなければと痛感する今日このごろです。

最後になりましたが、研究会の発展、皆さまのご健康とご多幸をお祈り申し上げます。

(和歌山県太地町) 和田千明

二〇一八年四月二十一日正午過ぎ、地下鉄半蔵門線神保町駅で下車、A9出口を出る。

急に視野が広がり、外は眩いばかりの青い空。汗ばむほどの暑さを感じられた。目の前の横断歩道を渡りすぐ左側に重厚な佇まいの学士会館が見えた。

事務局の戸村さんより送られた伊能忠敬研究会の資料には、多くの子孫の方々の参加名簿が記載され、これから始まる測量協力者顕彰式への期待に胸躍らせながら、学士会館玄関への階段を登った。

太地より二百回忌の 江戸薄暑

昨年七月末毎日新聞和歌山地方版に稲生陽記者の「測量協力の子孫名乗りをこの記事が掲載された。

盆用意の多忙な時期だったので、ひとまず記事を切り抜いておく。忠敬測量隊が太地浦に止宿したことは、過去の文献より知っていた忠敬さんが通ったに違いない東屋敷の通用門、和田の岩門は、二三年後の今も太地町にある。



古式捕鯨の祖 和田頼元の墓と共に

二〇一六年四月二十五日日本遺産に認定されている。盆行事を済ませた八月末新聞の切り抜きを探す。不思議なこと、すぐ見つかった。

和歌山県からは約八十人の名前が判明していたにもかかわらず、名乗り出た人はいない。四〇〇年以上太地に今も住む和田金右衛門本家の私たち親子と分家の孫才治家の計三名の顕彰式参加となった。



今回の忠敬没後二百年記念伊能測量協力者顕彰大会参加子孫の御先祖の事績一覧により、忠敬測量隊を案内したのが、紀伊国太地浦大庄屋和田孫才治であるという史実が明らかとなった。

勇魚捕りの 墓を守りて 四百年

伊能家八代目の妹である西村真紀裕司さんご夫妻のテーブルに座る。

太地から鯨の網捕り法を伝授した地と伝えられる土佐国奈半利浦庄屋子孫高原雄児さんと、肥前国針尾島(ハウステンボス)山目付楠本武之さん父娘と同席できたのも、不思議な縁

であった。

半島より 子孫集うや 忠敬忌



場所を移して内幸町ホールでの立川志の輔落語会。

「江戸時代忠敬が泊まった宿屋の子孫たち」と志の輔さん。そのユーモアに全員大爆笑。一時間半の独演会もあつという間に感じられ、シーボルト事件の高橋景保獄死に一同涙した。

志の輔の 景保ここに 春の月 翌日二十二日、バス二台で忠敬の史跡巡りをする。

偶然一号車の私の隣の補助席に座られたイノペディアをつくる会幹事、横溝さんより丁寧な説明をして頂いたのは、幸運であった。

二百回法要の源空寺では、また不思議な体験をした。

二人の僧の読経が終わり、バス二台に分乗した参加者の焼香もすんだ頃、志の輔の語った高橋景保の墓の隣に「為天下先」と書かれた大きい碑が一つ。横溝さん河崎さん年配の子孫の方二名と共に碑文を読む。裏をよく見ると、何やら私の目の高さに独語で shehold の署名が書かれている。

この碑は、昭和十年徳富蘇峰の筆によるシーボルトから景保への感謝文だとう。ふいに私の口から独語の碑文が三行口をついてでた。これには私もびつくり。独語は、第二外国語として習ったのみ。あたかもシーボルトが景保に謝罪しているかのような思いが、胸にこみ上げてきた。昨年シーボルトの子孫がドイツから来て、この碑を見て感動したという。

江戸薄暑 シーボルトの碑 語る
かな

戸村さん曰く、「この大会で二十二年間かかりましたよ」と。この大会を企画 実行するに当たり伊能忠敬研究会 会名 誉代表 渡辺一郎さんはじめ多くの方々の語りきれないご苦労があった事と推察します。歴史に埋もれていた祖先たちを再評価して頂き、全国の測量に協力した者の子孫が、二百年後の春、東京で一同に合うことができた意義は大きいと思います。研究会の皆様のチームワークに感動し、この二日間学んだこと、またこれからのご縁を大切に、郷里でも次世代に伝えていきたいと思います。

できましたら高橋景保の二百回忌に再び源空寺に詣でることを願います。

最後に富岡八幡宮忠敬像の前で得た一句。

万緑の ここからはじまる 一歩
かな

(兵庫県姫路市) 三木敏明

伊能忠敬没二〇〇年協力者顕彰大会に招待いただきありがとうございます。

会場は学士会館というネームバリエーもあり申し分なく、進行もよく検討されたのでしようスムーズでした。懇親会についてですが、同じテーブルの方々と懇談出来ました、他のテーブルの方々、誰がどこに座っておられるのか、顔を一部の人しか存じていませんでしたので充分話し合えませんでした。テーブル着席図があれば良かったかとも思います。

記念誌がすばらしい。府県別の編集に新鮮味を感じたし、内容もよくまとまっている。記念碑、標柱も全国市町村の協力でよく集まったと思います。そのほか渡辺さんの「全国測量」先祖の「事績一覧」などすべてが研究会でしか出来ない記念誌となっています。会員以外でも欲しい人がたくさんいると思います。編集に携われた方々のご苦労に感謝します。

志の輔さんの落語もよかったです。何を話されるのかと思っていました、よくあれだけの内容をよどみなく話せるものと関心。感動を与えて貰いました。もう一度聴きたい。

史跡巡りは富岡八幡宮と源空寺がよかったです。

忠孝の旅立ち姿が写真で見るとやはり実物という感じでしたし、作者

の酒井さんが会員というのも驚き、話が良く聞こえなかったのがちよつと残念です。

源空寺の住職はお経を誠実に読まれ、時間も充分あり皆さん焼香されよい法要となりました。

初めから終わりまで内容は充実、企画、準備をされた事務局の皆様ありがとうございました。

(東京都港区) 詫摩祥江

この度は、忠敬没後二百年記念伊能測量協力者顕彰大会に協力者子孫としてご招待いただきまして、誠にありがとうございました。

当日は、伊能忠敬研究会の皆様や伊能忠敬の御子孫の方々、また日本中の協力者御子孫の皆様方と一堂に会し、大変有意義に過ごさせていただきました。

特に、懇親会で同じテーブルを囲みました皆様とは楽しく会話を交わさせていただきましたながら、世が世なら、代官であったり地元の有力な庄屋や士分であったりされた協力者先祖を持たれる御子孫の方々と、しかもこんなことでもなければ生涯お会いすることもないかもしれない、日本中からこの日東京の学士会館に集われた方々と言葉を交わすという、考えてみたら奇跡のような時を過ごしているの不思議な感じを抱いたことでした。

私の場合は、この会自体を知るに至

りました経緯が全くの偶然から成り、たまたまインターネットで何となく岡山の福岡屋を検索していたところ、岡山放送のアナウンサーの方のブログから、伊能忠敬研究会が忠敬協力者の全国の子孫を探すにあたり岡山の福岡屋の子孫だけが見つからないということを知り、そのアナウンサーの方に連絡したところこちらの会の方に橋渡しをしてくださったという次第です。

自分が岡山の脇本陣福岡屋の子孫であるということは、幼い頃から今は亡き父に事あるごとに教えられ、家に残っていた宿帳や福岡屋の屋号の書かれた大きな判子などからそれを疑う理由もなく育った私でしたが、それが、このような学術的に意義のある会に出席させていただくことになろうとは、思ってもみませんでした。

しかも、数十年前の私が小学六年生のある日、その宿帳をパラパラめくって見ていた時に、「伊能忠敬」という署名を見つけ、これはあの、学校で習った、日本地図を作った伊能忠敬かと驚いて父に聞き、このことを元に学校の自由研究で「私の先祖」と題した作文を書くことまでしなければ、福岡屋と伊能忠敬を結び付けて記憶に残すということもなかったでしょう。

残念ながら、その宿帳等は事情があり実家の宮城家には残存しておりませんが、私の目の裏には、その「伊能

「忠敬」の一際大きめに書かれた墨文字が数十年経った今もありありと残っています。

今回、私が初めて知って驚愕を禁じ得なかったことの中に、岡山城下下之町の脇本陣福岡屋宮城吉郎兵衛宅に全国で最も多く、忠敬が四十六泊も逗留したという事実があります。伊能忠敬研究会著『伊能忠敬 日本列島を測る 後編—忠敬没後二〇〇年—』によりますと、「福岡屋に「地図仕立役所」を設けて、日中は測量地の推算（計算）と下図の整理・作成、夜は天文測量を基本的日課としている。」とあり、また

伊能忠敬研究会の戸村茂昭様からのご教示による大谷亮吉編著『伊能忠敬』には、「天測（天体観測）」において各地の緯度決定のための原点緯度を、江戸深川の隠居宅天文台だけでなく岡山城下脇本陣も原点扱いにしたと明記しているということ。さらに戸村様によれば、福岡屋で一〇日間も天測を行っているのは、同じ宿舎に長期宿泊して、夕方から明け方までのたくさん恒星を何回も測って誤差を減らし、その観測データを基本に西日本各地で天測したデータと比較することで、各地の緯度を決定したとのことでした。

つまり、単に宿屋に大人数で宿泊した、その便宜を図ったという功績に留まらず、日本地図作成のための緯度を決定するという実助的な一助ともな

っていたという事実を知り、改めて先祖である福岡屋宮城吉郎兵衛の功績に誇りの気持ちを持たせることができました。

士農工商でいえば最下層でありながら、福岡屋は岡山藩主から宮城という名字帯刀を頂き、また城下の白粉座の権利も所有しており、「娘見るなら福岡屋」という流行り歌まであったことは父からもよく聞いていました。しかし、父の祖父つまり私の曾祖父が福岡屋の最後の人で、岡山藩主の常宿の部屋を子供の頃に見て育ちますが、明治の瓦解のときに、福岡屋と並び岡山三商家と言われた他の二つの家がそれぞれ時流に乗ってうまく商売替えが出来たのに、苦勞を知らない一人息子として育った曾祖父にはそれが出来ず、脇本陣は終焉となりました。実家を福岡屋として育った私も、それなりに生まれた家を誇りに思う気持ちはありましたが、祖父の時代からは宮城の家も全く異なる業種の問屋となっており、福岡屋は遠い昔のお伽話のような感じで考えていましたので、今回、このように歴史的な偉人の偉業に多少なりとも協力した先祖を持つていたということを知ることが出来たのは、私にとっても大変ありがたく嬉しいことで、宮城吉郎兵衛さんを実在の人物として改めて実感することが出来ました。

ただ一つ残念なのは、この事実を知

らずして父が今は亡いことです。歴史好きで、商家の人でありながら生前は歴史書もよく読んでいた父でしたので、このように先祖のことまた伊能忠敬のことを改めて知ることが出来ていたらどんなに喜んだかと、そして、喜び勇んで顕彰会に参加させていただけに違いないと、今はそれだけが大変に惜しまれます。

（広島県広島市）宮尾昌弘

この度は本当にありがとうございました。このような大会を企画するに当たり、大変なご苦勞があったらうと推察されます。

本当にご苦勞様でした。この大会に参加させて頂き、伊能忠敬に関わるこれほど多くの方々の子孫が一堂に会する事のご縁を実感させて頂きました。

この企画の関係者の皆様には、感謝に堪えません。

伊能忠敬の才能はもろろん、それに関わる先人たちの献身と努力があればこそその忠敬の業績に繋がったものと考えを新たに致しました。

今後ともよろしくお願いいたします。

第六次測量

（東京都新宿区）川端習太郎

この度の伊能測量協力者顕彰式に出席の榮に浴し深く感謝申しあげます。

私は申し込みが遅れましたのでキャンセル待ちではございましたが、早くから申し込まれた方と全く同様、功績感謝状を受領し、さらに4冊にのぼる資料等を頂き有り難うございました。長男が小生の代理で大会に出席いたしました。たいへん感動したと申しております。

当日配布されました、功績感謝状をはじめ参考書籍から参加記念のしおりに至るまで、きめ細かな、至れり尽くせりのご配慮にただただ深くお礼を申し上げる次第です。

功績感謝状を受領したのは先祖であり、仏壇に供えて報告しました。川端家にとっては家宝となりました。

今回このような榮譽を受けるようになりました発端は、川端家の菩提寺である兵庫伊丹の浄土宗法蔵寺の住職がまとめられた「川端家来歴」の中にあり、先祖の川端七右衛門が昆陽本陣を勤め、そこに伊能忠敬が止宿されたことが「忠敬先生日記」に記されていることを確かめ、名乗りをあげた次第です。菩提寺の住職にも今回のことは報告しなければと思っております。

今回配布されました、参加子孫の御

先祖の事績一覽(暫定版)を拜見し、ここまでよく調べあげられたご努力に厚く感謝申し上げます。川端七右衛門は、第六次測量のトップにあげられておりますが、播磨国昆陽村は、摂津国昆陽村が正しいので、今後、改訂版をお作りになるときはそのように訂正いただきますようお願いいたします。そうしますと、この一覽で見える限り、摂津国の関係者は川端七右衛門ただ一人となります。

今回の大会の成功は、当日の準備も含めてほんとうに多くの方々、伊能忠敬研究会の皆様のご尽力の賜で、参加子孫の一人として改めて厚くお礼申し上げます。

以上、取り急ぎ、言葉足らずながら、お礼申し上げます。

(東京都目黒区) 高原雄児
顕彰大会に参加させて頂き、まことにありがとうございます。

戸村様をはじめとし、大会運営の方々のお働きがとても気が利いたもので、大変楽しくかつ勉強になる大会でした。

顕彰会、食事会、志の輔師匠の落語、翌日の所縁の地ツアーと、どれを取っても素晴らしいもので、とても思い出深い経験になりました。

普段は先祖のことは全く考えないのですが、本顕彰をきっかけに先祖のことや地元高知奈半利のことなどを

考える良い機会を与えて貰ったと思います。

本当にありがとうございます。

(千葉県柏市) 森田蒼生
このたびの顕彰大会は本当にご立派な式典でした。

戸村様にはさぞ御苦労の連続ではなかつたかと、お察し申し上げます。さて、早速にも写真をお送りいただきましてありがとうございます。

当日私のデジカメではこのように綺麗に映っていないので、子供たちや孫にもどう伝えようかと悩んでいたところでした。

ありがとうございます。

このような立派な式典にご招待にあずかれましたのも、ご先祖様森田五右衛門さんが日本の偉人伊能忠敬測量隊のお迎えに向いたご縁です。

なんとも光栄のいたりです。

なお、ご存じかもしれませんが、六月六日のNHK番組の歴史ヒストリアで「仮 伊能忠敬」を制作していることが、私の故郷愛媛県西条市小松町「小松温芳図書館」の学芸員友澤 明氏から連絡がありました。

NHK大阪の制作部林リサーチャー、高木デレクター、井上制作部長の連名で「小松藩会所日記」の伊能測量隊の応接部分関連記事の使用依頼があり、会所日記の森田五右衛門明正の応接の記事が出るかもしれないとの

ことでした。

どうなるかわかりませんが、取りあえずお知らせいたします。

小松温芳図書館
komatsutoshokan@sajo-city.jp
です。

もう一つ、高知新聞の福田さんから新聞記事を送っていただきました。今後ともよろしくお願いいたします。

(香川県高松市) 揚 三容
先日の顕彰大会では大変お世話になりました。

伊能忠敬というつながりだけで二〇〇年を越えての交流、次は一〇〇年後?思い返してみると本当に夢のような二日間でした。そして、このような会に招待していただいたこと、感謝の言葉に耐えません。

伊能家の方々にお目にかかれたことは非常に光栄でした。また、墓がなくなっていくこの時代に、測量を支えた方々の子孫が今もそのことや家を大事に守っているということや家で感じられたことが今回の何よりの収穫でした。

立川志の輔さんの落語も息づかいの感じられる上席で見ることができ、堪能いたしました。

また、伊能忠敬のことを皆さんが「ちゅうけいさん」とおっしゃるのには大変驚きました。

さて、帰りの時間の都合で、法要の途中で失礼しました。上野まで歩いて電車に乗り、帰路についたのですが、東京駅で顕彰大会でいただいた紙袋がないことに気づきました。その中には、今回の目的であったご先祖様への表彰状が入っています。戻ることで、帰りの便に間に合わないことが予測されましたが、何のために来たのかと大慌てで上野に戻りました。

PASUMOのチャージのときに忘れたのだろうと、券売機まで確認に行きましたがありません。これはもうダメかと思いつつすぐ横の改札の方に確認、中身はすべて把握していましたので、説明すると、そこに届いていました。

重々にお礼を言ってお電車に飛び乗りました。羽田についたのは二十分前で、保安検査場はすでに締め切っていました。でもお陰様で何とか次の便への変更ができ、無事に帰宅することができました。表彰状を仏壇にお供えし、報告することができてやれやれでした。

次の上京はいつになるかわかりませんが、今度はゆっくりと伊能でGo!を楽しみたいと思います。

戸村様におかれましてはいろいろな事務的なお仕事、本当にお疲れ様でした。まさに顕彰ものですね。写真もありがとうございます。同席の方の名前も入れていただき、これもありがたい。思い出になります。

伊能忠敬研究会のますますの発展と皆様のご健勝ご多幸を祈念してお礼の言葉といたします。

第七次測量

(北海道札幌市) 矢橋潤一郎

このたびは感謝状をありがとうございます。ありがとうございました。

私の先祖の矢橋廣助は、中山道赤坂宿(現在の岐阜県大垣市)本陣で、九州第一次測量と第二次測量の際に合わせて三度、伊能忠敬さんと分遣隊をお泊めました。文久元年には皇女和宮もお泊まりになった所です。その建物は父(昭和九年生まれ)の代まで住んでおりましたが、父が北海道で会社を起こした後は空き家となりました。老朽化もあって取り壊し、跡地は大垣市に寄贈、現在は公園として利用されております。

私は生まれも育ちも札幌でして、父の生家が消えてからの大垣は、墓参りでしか行くことはありません。地元に住んでいないと、ルーツに関する話題に疎くなるもので、子孫でありながら廣助のことはよくわかりません。伊能さんのことは、父や親戚から幼少の頃に聞いたことはありませんが、古文書等で残っているわけではありませんでした。二〇一一年、「伊能忠敬測量日記」DVD化のニュースを父が聞きつけ、すぐに購入、廣助の登場部分を探

すよう言いつけられました。ちゃんと伊能さんが書いてくれていたと、父はたいそう喜んでおりました。

「伊能忠敬に協力した人の子孫どこ？」と新聞で呼びかけられたのは、その五年後になります。二年後に感謝状を渡します、という記事でした。二年も前から準備するとは大層な、とは思いましたが、このたびの顕彰大会の大掛かりな様子を見ると、逆に二年でよく準備されたものと感服しました。

先祖が伊能さんに協力した、ということを知っている、ということを知っている、という代などが脈々と語り継いでくれたおかげです。私のように先祖の拠点から遠く離れた土地で生まれ育ってしまふと、そうした語り継ぎが途絶えてしまふ恐れがあります。測量日記に登場するのべ一万二千人が、二〇〇年経って、家系が途絶えたかもしれないし、言い伝えるのを忘れてしまったかもしれないし、子孫集まれの報道に接しなかつたかもしれないが、当日感謝状を受け取れたのが一〇七人だけで、その中のひとりに入れたのは光栄です。二緒した子孫の皆さんとお話したところでは、私のように地元を離れた方も語り継いでいた方もいれば、二〇〇年前の家で現在も暮らしている方もいて、抛り所はそれぞれながら、二〇〇年の家族、というか家系のスケールを感じました。

私個人は現在、北海航測という航空写真測量の会社を経営しております。父が起こした会社を十五年前から継いでおります。測量業者は、全国的に毎年、伊能図フロア展を開催します。

私も道内での展示を何度か手伝いました。体育館ほどの広さがなければ敷ききれません。測量業者は、精度の高い地図を二〇〇年前に作った伊能さんに敬意を表しています。奇しくも二〇〇年後に子孫の私が伊能さんの仕事を、手伝いどころか生業にしているのも、ご縁です。顕彰大会で国土地理院の院長さんが、祝辞の中で測量について当時と現在の技術の違いを紹介されていきました。当社も国土地理院から受注して測量しております。祝辞は、業者としても興味深く拝聴しました。

当社は、国内でも数台しかない航空レザ機を保有しております。東日本大震災では、発災直後に自社飛行機を東北地方へ飛ばし、復興にお役立ていただきました。空から、しかもデジタルで測る時代になりましたが、要領は伊能さんの頃が基礎となっております。私は五十歳になります。が、子供もいないので、廣助以来語り継いできた伊能さんの話もこれで一旦終了となります。全国の初対面の、それも二〇〇年前の先祖が各地で伊能さんのお手伝いをしたというだけのつながりで集まった、というのは、志の輔師匠も面白がっていました。が、コーデ

イネートされる方がいてこそです。とても素敵な機会をいただき、ありがとうございました。

(東京都調布市) 小野友子

拝啓

新緑香る頃となりました。

その後も皆様にはご健勝にお過ごしのことと存じます。

この度の伊能先生亡後二百年記念祭におきまして、お招き頂き、又盛大なるお式やレセプション、身に余る光栄な接待をして頂きまして、申し訳なく感謝しております。

少々暑い日でしたが、雨も降らず、お天気に恵まれました。良かったと思っております。

又、二日目の法要や諸々の巡りも東京にいらしても、あまり行かない所でしたので、とても参考になり、興味深く、楽しい一時を過ごさせて頂きました。本当に有難うございました。

天候不順の折でございます。どうぞ皆様お身体をご自愛くださいませ。

感謝の気持ちをこめまして。かしこ

伊能忠敬研究会会長様

戸村様

他皆様

帰りに戸村様と写真を撮りたくて御捜ししましたが、残念でした。

(東京都多摩市) 高月 雅

顕彰大会では大変お世話になりました

私事でございまして誠に申し訳ありません。絡が遅くなり大変申し訳ありません。

奄美大島のあたりは昭和三〇年、四〇年代ころまで茅葺きの家でしたので景色も含めて西郷さんの時代とそう大差はないように思います。



昭和 30~40 年代までの港の風景



昭和 30~40 年代までの町の様子

私が子供のころは飛行場もありませんでしたし、大型船も港には接岸できず、沖合で小型のハシケに乗り換えて港まで行き、ハシケから細い板を渡して上陸していた記憶があります。

西郷さんの妻になった愛加那こと龍愛子、本名於戸間金(オトマカネ)は私の母方の祖父の方の大おばさんにあたります。

龍家は元々は琉球からきた家で当時の奄美の支配者にあたり、龍家の初代の当主の母親はノロと呼ばれる琉球王から任命された神女でした。

本土の方はノロとユタを混同しますがユタが町の占い師だとしたらノロは国家公務員のような立場でした。



龍 愛子の墓

大河では今後、西郷さんが沖永良部に流刑された時に西郷さんを助けた人物として土持政照とその母の豊山

鶴(ツル)も登場すると聞いていますが、豊山鶴は私の父方の曾祖母の家の者で、息子の政照の嫁のマツは大久保利通の一番末の妹にあたります。

薩摩で伊能さんをお泊めした山川の大迫の家の清右衛門が島代官として沖永良部に赴任し、沖永良部でその妻になった豊山春は土持政照の母の豊山鶴と同じ家の者で、豊山家は元々は琉球王家の一族です。

六〇〇年前、琉球で北山王と南山王が中山王に破れ、中山王が琉球王国を統一した時、沖永良部を支配していた北山王の第二王子の世之主さんが盛大な勘違いをしてしまい、奥方、第一王子もろともにしなくてもいい自害をしてしまったために世之主さん亡き後の沖永良部を統治するために琉球から遣わされてきたのが豊山一族です。

思えば、そんな家の人間が薩摩に島を支配された後に薩摩からきた島代官の妻になったこと、同じ家の者が息子と一緒に西郷さんを助けたり、その息子の嫁が大久保利通の妹であったり、島代官の大迫が任期を終えてやがて戻っていった薩摩の家では時代こそ違えど江戸からやってきた伊能さんをお泊めしていたこと、などなど・・・

いろいろ考えると、歴史のうねりと言うのか奇縁とでも言うのか、人と人、家と家も何かしら互いに繋がりがあ

って今があるのだなあとつくづく実感しました。

沖永良部の家に残っていた昭和三〇年、四〇年代の建て直す前の家や港、町などの写真を添付いたします。



昭和 30~40 年代島 沖永良部の茅葺きの家



家の作りも西郷さんのころとあまり大差ないと思います。

黒い四角い箱のようなものの写真は沖永良部の豊山の家に残っていたもので、恐らく大迫清右衛門が薩摩の山川村から持ってきた枕だと思いません。

沖永良部にはハブはいませんが奄美でのハブ被害は昔から当然あったと思います。

私が中学生のころ市内のバスも通る大通りに面した場所に住んでいる

親戚が隣の家に行こうとして門から
家屋に続く道を歩いていたら一緒に
歩いていた親戚の飼猫が庭の植え
込みから出てきたハブに咬まれて死
んでしまったこともありました。



江戸時代の枕

添付した画像は薩摩に搾取されて
いたサトウキビの収穫の資料ですが
血清もない時代にそうしたハブの危
険もある中で収穫しても全て薩摩に
持つていかれ、指先についたサトウキ
ビの汁を舐めただけで酷い刑罰が与
えられていたので当時の人たちの恨
みつらみは今でも続いていて実際に
沖永良部にいた時も薩摩は恨んでも
恨みきれないとサトウキビを収穫し
ていた島の人が言っていました。

集まってもせいぜい関東在住の方
々くらいではないのだろうかと思
像していたのですが、思っていた以上
に全国各地から子孫の方々が集まっ
ておられてびっくりしました。
父方母方の家のことを元々調べて
はいたのですがもっぱら琉球、奄美、
沖永良部関連のことが中心で、薩摩の
大迫の家のことは資料も残っていな
かったためにほとんど何もわからず
にいましたが、たまたま目にした朝日
新聞の記事がきっかけになって、伊能
さんをお泊めしていたということを知
ることができて嬉しかったです。
自分の先祖にあたる人たちのこと
などを戸籍や資料を眺めながらいろ
いろ調べていると、会ったこともなけ
れば顔も知らず、古い戸籍を見るま
で名前どころか存在すら知らなかつ
た遠い遠い昔のご先祖のことを改め
て知ることとなり、例えば一歳の誕生



刑罰 (左: 足枷 右: 首枷)
砂糖の製造が粗悪な時はカブリ (首
枷) シマサ (足枷) の刑、密売する
者がいると死刑に処された。

日を迎えることもなく亡くなった先
祖の名前なども初めて目にしたりで
なんというのか、こうした機会でもな
ければ全く知ることがなかったこと
もわかってきたりで、例えばおかし
いかも知れませんがこの際い供養に
なったような気もしますし、顕彰会で
各地の子孫の方々と二〇〇年の時を
超えてお会いできた続く縁にも驚い
ています。

いただいた資料に伊能さんが召し
上がった料理を再現した写真があり
ましたが、規模は小さくてもいつかま
たどこかで集まり、同じものを子孫同
士で食べる機会などがあればおもし
ろいかも知れないと思ったりもしま
した。

準備等、本当に大変で苦勞なこと
だったと観察いたします。
今回参加できてよかったです。
心よりありがとうございます。

(広島県福山市) 山根季久子
その節はお世話になり、有難うござ
いました。

その後お疲れが出ていませんか？
温かい大会、有難うございました。
そして大会の準備、当日の裏方さまご
苦勞さまで。本当に有難うございま
した。

この大会の開催により、私が得たも
の感動したものは数知れず・・・。
まず物知らずの私が、伊能忠敬測量

の偉業、あの当時の測量道具での細密
な地図作成など、伊能忠敬自身の人間
力、器量を持つてこそ、頼もしい弟
子たちと共に成し遂げられた偉業だ
と、改めて認識いたしました。

また、私は落語を生で見聞きするの
は初めてでした。

テレビでの落語、それ故の乍ら落語
を聞く事しか知りませんでした。
立川志の輔さんのこの度の落語を
聞いて、落語の素晴らしさ、話術の高
度な技、演目の素晴らしさ

何かはわかりませんが、あの引き込
まれる空気、立川志の輔さんの醸す表
情、声色、しぐさのあの空間に引き込
まれてしまいました。

あのなんとも云えない感動、動揺、
今でも蘇ってきます。

本当にこの度は、心に残る体験の機
会を与えてくださり有難うございま
した。

またこのような会を待っています。
よろしく願います。
本当に、本当にありがとうございます。

第八次測量

(佐賀県伊万里市) 川浪富士夫
1. 立川志の輔様の話の中で、GPS
の現在の日本地図と伊能地図が一
致した所と、最後の江戸城で、殿様
が亡き伊能忠敬さんと会話された

時、ホントにそこに、忠敬さんが、舞い降りた様に見えて、すごく感動しました。

2. お墓まいりにも、参加させてもらって、大満足でした。

質問について、

素朴な質問で、恐縮ですが、伊能隊が、泊に来ると連絡が入る場合、どこから、どの様に、連絡が入るのでしょいか。(たとえば、佐賀藩から、人力か馬かで、手紙で来るのでしょうか?) 以上ですが、よろしくお願い致します。

先ほどメールをいただいたときは運転中で、今ほど我が家に到着、早速送ってくださいった写真に飛びつきました。肥前国の中島様ご夫妻と同席で、しかも中島倅様と隣の席でいろいろお話を伺いました。ご夫妻揃って温かいお人柄で、いいご縁を結ばせてもらいました。一度佐賀県を訪れたくなり、伊能先生の歩まれた道の一部をたどってみたいものです。

何度もお写真をお送りくださりありがとうございます。思い出がふつふつわいてきます。まずはお礼申し上げます。

戸村様、おやすみになる暇がなさそうですね。お疲れがでないかと案じられます。ご自愛くださいませ。

(佐賀県伊万里市) 岩橋伊津子
お礼が大変遅くなり申し訳ありません。

せん!

偉大な伊能忠敬 顕彰大会にお招きいただき

光栄の至りでございました。

ご先祖様に感謝はもちろん、顕彰大会開催にあたりご苦勞頂いた研究会皆様に心より感謝申し上げます。

本当に有難うございました!

佐賀県人の集合写真も有難うございます!

その写真と共に、地元の佐賀新聞に大きく掲載されたりヤフーニュースにも載ったりで、お陰様でチョットした有名人になりました。(笑)

五日間 東京に滞在した後、帰ると休む間もなく選管へ第二回目の収支報告書(市長選挙)提出等GW返上でバタバタと忙しくしております・・・が、戸村さま程ではないかな?

どうぞご無理なさらずくれぐれもご自愛くださいませ。

(佐賀県江北町) 中島 倅

顕彰大会では、大変お世話になりました。大きな大会に際しましてのご苦勞は如何ばかりかと思ひ、感謝いたします。

とても感動いたしました。有難うございました。

改めて、ご先祖様の功績の偉大さを感じました。

数人の方とお話しする機会があり感じたことは直系で残っておられる

のは少なく思いました。当家は続いていますので、大事に語り次いで、残していきたいと思ひます。感謝。

(福岡県久留米市) 久保山隆吉

忠敬先生没後二〇〇年記念伊能測量協力者顕彰大会について伊能忠敬研究会・イノベディアをつくる会の皆様には大会の資料等準備のため大変な苦勞が有ったことと拝察申し上げます。

実測による日本全国の測量という極めて途方もないことを成し遂げられた伊能忠敬の伊能隊(本隊及び支隊)に先祖が協力したということを知りに思っています。

この度伊能測量協力者顕彰大会が計画され、それに参加させて頂き全国から子孫の方々が一堂に会されたのを見て、改めて忠敬先生の徒歩で全国を測量し現在の全園地図と遜色なく作成されているとのことであり、不可能と思われる事を可能にされた忠敬先生の足跡は驚くばかりです。

私事になりますが、これも偏に苦勞をされて綿密な調査を行い久保山家の先祖にたどり着いたという事を知らせくださった、久留米市善道寺町在住の小坪隆氏に、この紙面を借りて厚く感謝申し上げます。

(長崎県東彼杵町) 川口正志
先日の、顕彰大会、ご招待いただき

ありがとうございました。心のこもったお世話をしていたいた皆様に感謝申し上げます。御準備、大変だったことでしょう。

今回、立派な功績感謝状を頂き、ありがとうございました。顕彰会に招待いただいたこと、また会の中で近隣の子孫の方とも交流ができ、いろいろな事を知ることができたこと、私の人生の記念の一ページになりました。それから、やはり伊能忠敬先生が如何に偉人であつたか再認識いたしました。それは今回私は長崎から東京まで飛行機に一時三〇分乗っているだけで来ることができましたが、伊能忠敬先生は東京から長崎まで歩いて来られ長崎県内の島が多い所を隔々まで測量された。今の現代人にはとうてい出来な作業と思われまふ。それに出来上がつた地図は現代の地図と誤差がそれ程ない正確なものであつた。感銘しました。こんな伊能忠敬先生の事や当時の測量がどういう経過で行われたか、また、今回の顕彰大会の事を知っていただくために先日、地元の長崎新聞に取材をしていただき掲載していただく予定です。

ただ私にとってひとつ残念な事があります。それは頂いた本の「伊能忠敬 日本列島を測る後編」の第3章、全国記念碑・案内板等めぐりで、個人設置また平成三〇年建立された(p1

01-64, 78, P.95-13, P.97-21, P.99-63)

の掲載がされているのに、私の所の川口六右衛門昼休憩地の「伊能忠敬休憩の地」の顕彰碑を掲載していただいていない事は非常に残念でなりません。伊能忠敬先生の偉業伝えるために頂いた本「日本列島を測る」(妻の分)を町の教育委員会に寄贈したいと思っていますが、本当に残念に思っています。京都の地理学研究者、上西勝也様も昨年我が家の顕彰碑を見学に来られています。小言を言って後味が悪くなりましたがお許しください。

今後、伊能忠敬研究会が益々、御発展されること、伊能忠敬先生の測量事業がどれほど偉業だったか連綿と伝わることを御祈念してお礼申し上げます。

ありがとうございます。

(兵庫県伊丹市) 楠本美紀

先日はお世話になり、ありがとうございます。ありがとうございました。

父も大変喜んでおりました。

顕彰大会の話友人や知人にしますと、皆一様に驚き、珍しがり、面白がります。

わたしも父からこの話を聞いたときには、なんて面白いことを考えるんだろう！と、参加を即決いたしました。私達の場合、伊能忠敬さんと先祖にご縁があったことは十五〜二〇年ほど前に知りました。

佐世保の針尾島に父の実家があります。その針尾のあゆみを書いた本に、父が小学生の頃に見つけた石器時代の遺物が写真で掲載されており、くつきりと「楠本武之発見」と書かれていたことから父の同級生が面白がって送って下さったことから始まりです。

父の発見した石器や、先祖である儒学者の楠本端山、碩水についても記載されていたことから、その本を読み進め、楠本丈助が伊能忠敬さんとご縁があったことを知りました。

端山、碩水(忠敬さんが来られたすこしあとに生まれました)も有名ではあるのですが、知る人ぞ知ると言った感じのようで、日本国民なら皆が知っている伊能忠敬さんに宿泊いただいたことはただただ誇りです。

私達のようにひよんなことから知ったご子孫の方々というのは意外と少なかったのでしょうか。

皆様、研究会に入られていたり、懇親会でも様々なお話をされていて、非常に詳しく、感心いたしました。

また、私の右には西川先生がいらっしやいましたので、先生からのアプローチによる伊能図のお話も聞けて、非常にラッキーでした。それと、子孫を集めるという考えはどなたが発案なのでしょう。今となっては、というか昔も、完全に他人ですものね。

本当に面白いことを考えられる方ですね。今回、このようにご一緒できたことは、西川先生もおっしゃっておられました。袖振り合うも多生の縁、ですね。

落語も初めての経験でした。面白かったので、一つ趣味が増えそうです。

戸村さんは非常にテキパキされて活躍で、父にももっと元気に楽しく生き生きと過ごしてほしいと思いました。

長々と書いてしまいましたが、子孫で、参加できて良かったです。ありがとうございます。

お元気で過ごしてください。

端山のこともご覧ください。

<https://www.nagasaki-tabinet.com/guide/269/>

(東京都武蔵野市) 坪井隆治
数えれば曾祖父の、また祖父に遡ること六代前、二〇〇余年前の一宿一飯というべきご縁は、面映ゆい思いもありました。

伊能忠敬研究会発足の頃から参加されている安藤由紀子さんは、私の妻の友人で家にもよくお見えになっていて、測量日記のことなどお聞きしていました。肥前五島で病没された伊能測量隊の坂部貞兵衛副隊長などの事跡調査に行かれるとのこと、私は五島の生まれ育ち、五島文化協会の方を

紹介したこともありました。その数年後、長崎・五島で催された「伊能ウォーク」に一緒に参加するのを楽しみにしていた矢先、安藤さんの骨折怪我でした。伊能陽子さんは参加され、連れ立って五島灘と島々を一望する福江島の山路を歩きました。今はもうお二人は相次いで亡くなっています。

顕彰式を終えた夜の部、忠敬先生の大河への道を滋味豊かに語ってくださった志の輔師匠は、私たちをほのぼのとした心持ちにしてくれました。街の灯に賑わう有楽町の小路、移ろい過ぎた日々を懐かしみながら駅へ向かいました。

(埼玉県さいたま市) 中和健

二〇一八年四月二十一日土曜日、伊能測量協力者顕彰大会に御招待頂き有り難く厚く御礼を申し上げます。

当会は、伊能先生のご縁で参集した方々、錚々たる関係者御子孫の方々、二〇〇年以前には先生から親しくお声を掛けて頂いた方々です。

主催者の伊能忠敬研究会・イノペディアをつくる会の研究業績成果は大きなものです。その成果の冊子を下さ賜頂き重々御礼を申し上げます。

当日懇親会では同じ卓に忠敬先生の立像をご製作なさった彫刻家酒井道久先生と親しくお話しを頂戴いたしました。

像の写真を頂きました。後日実物を

拝見に何う積もりです。

日本列島を測る後編二十一頁には、旅館「さこや」の胃薬「陀羅尼助」の事が書かれています。

私は五十五年前、四十年前に吉野山へ花見で訪れました。

「さこや」に泊まり、フジイ「陀羅尼助」の店でこの薬を買い求めました。店頭には大きなガマの木彫が鎮座しています。物凄い苦い薬で、舌は痺れます。よく効く薬です。

忠敬先生は「さこや」に泊まり「陀羅尼助」を服用なさったのでしょうか。私とは大変なご縁です。

(兵庫県篠山市) 加賀尾宏一

四月二十一日・二十二日は、全国的に最適日に恵まれ没後二百年記念にふさわしい日となりました。

このたび開催されました伊能測量協力者顕彰大会に置かれましては、貴殿には、何かと格別の

ご支援を賜り、誠にありがたく厚くお礼申し上げます。

お陰様で、伊能忠敬子孫ご一同をはじめ、関係者の方々には多大なるご尽力によりまして、名誉ある功績感謝状を浴することになり、私にとって思いもよらぬ喜びであります。

今回いただきました多くの製作物は家宝として末永く活用・保存させていただきます。

ここに、この事業の発案から今日を

迎えるまでに準備された時間の皆様に改めて厚く感謝申し上げます。

ところで、当日バス解散後、東京に在住しております加賀尾家十三名が集まり、感謝状を披露し、改めて先祖代々五兵衛に思いを馳せる夜となりました。

翌朝は、国立公文書館に出向き、かねてより宿題にしておりました地元「笹山」から「篠山」への改名の記録、経緯を調べることになりましたが、あいく休館日で次回となりました。

末筆ながら、貴会の横溝高一様によるしくお伝え下さい。

(このたび、地元丹波市春日町臼井隆雄様から横溝さんが大学の学友として紹介を受けておりました。)

時節柄 くれぐれもご自愛のほどお祈り申し上げます。

(京都府亀岡市) 桂 文子

伊能忠敬の名前と業績については教科書程度の知識があったのみで、自分とのなんらかの関わりがあることなど、知る由もないままに過ぎしてきました。

丹波亀山藩の本陣にも宿泊した、と知ったのは古文書を寄贈した亀岡資料館の展示を通じてのことだった。

『新修亀岡市史』記載の詳細な記録も今回がきっかけとなって初めて読んだ、という体たらくである。そんな私に知人から、京都新聞掲載のイノペデ

イア関係の記事が送られてきたのが、この発端であった。早速に連絡担当の戸村様にご連絡し、それ以来、Blog等を通じて交信が続き、今回の大会への参加となった。

ご先祖さまの尽力のご褒美？を子孫の私が受ける、というのにもなにか面はゆい・・・というのが正直な思いであった。だが、全国から集まられた皆様と一堂に会してみると、伊能忠敬という偉人を介して繋がっているのだ、というこれまたなんと形容しがたい感動を素直に覚えたのであった。

私が住む亀岡(旧亀山)は山に囲まれた盆地である。秋から冬にかけては屋頂まで霧が深く垂れこめて、時には陰鬱な感じを免がれない。近年は団地用に山が切り開かれてきたおかげか、霧もずいぶん少なくなってきた。とはいえ、空がどんより重く薄暗い亀岡からトンネルを通り抜けると、パツと明るい陽射しが注ぐ京の町に入ることになる。カール・ブッセの『山のあなたの空遠く、幸い住むと人のいう』という詩句に共感してきたものである。そんなこともあってか、里山歩きを重ねるうちに、誘われて地域の山岳会の会員となり、南北アルプスへも誘われるままに登ってきた。深田久弥の百名山も七割ぐらいいは登ったか、と思ふ。還暦を過ぎてからはこの山岳会と称しての近畿一円の山々を歩く会

に気まぐれに加わっている私である。先日の顕彰会の進行中、なぜか、伊能忠敬に田中陽希さんが重なってきた。プロアドヴェンチャーレーサーという肩書で、日本列島の山々を南北すべで、自分の足で踏破している人。まだ三十半ばくらい。車など使わず、移動はすべて自分の足で歩き、島から島へもカヤックというのを操ってわたっていくのである。百名山一筆書き、二百名山一筆書きをすでに終了し、現在は三百名山一筆書きに挑戦中である。踏破した山の感想を一筆にたくして寸評することから、「一筆書き」と称しているらしい。ネットで調べたら、「山の魅力は高さだけで決まるものではない。どれだけその山の魅力に気づくことができるかが大切であり、どちらかといえば登山者の方が山に試されているのだろう」と味わい深いことを発していた。

ところでこの田中陽希さんと接点のある鈴木康吉氏、別名、「平成の伊能忠敬」さんなる人物について戸村様よりご紹介を受けた。『伊能忠敬研究第81号 No.1年』記載の戸村様の寄稿『平成の伊能忠敬・沿海歩行日記』の送信に与かったのである。詳細についてはこの研究会誌をお読みいただければ、と思うが、拝読して驚いた。この「歩いて日本の沿岸一回り」を実践中の鈴木氏と上記の二百名山一筆書き踏破中の田中陽希さんとが遭遇

した、とあり、ふたりの写真がならべて掲載されているではないか。そうか、私の脳裏でオーバーラップしていた二人は、現実に遭遇していたのである。この鈴木氏、第一行程の日記はその日の出来事などを電話などを通じて日々友人に報告し、それを友人がメモに取られたものとか。第二行程は自ら Page book を通じて発信しておられるようだ。電子機器を通じての仮想現実世界を楽しむ現代に、リヤカーを引き、テントで野宿しつつ、徒歩で沿岸一周を企てるのは、平成のドン・キホーテと呼ぶ方がピッタリかとも思われるが、その日記を読んでもみると、自然の景観もふくめて人間世界の実態をつぶさに体験実感するには、やはり昔ながらに自分の手足などの身体機能、また目や耳など五感を活用するのが、遠いようで実は近道なのではないか、と考えさせられる。言葉や画像を通して追体験、疑似体験ができる現代は素晴らしいが、人と人との交流を通じて感じ、学ぶものにはくらぶべくもないのだから。

忠敬も自分の生きる日本という国の全容を知りたい、という願望に突き動かされて踏破したのであろうが、それぞれ土地の魅力、また、そこに暮らす人々のなりわいの在り方にも常に新鮮な魅力を発見する喜びがあった。こそ貫徹できたのではないだろうか。日本には業平、西行、芭蕉という

歌を愛し、旅を通じて人生を語った先哲がいる。忠敬の場合は養子さきの家業を盛り立て盤石の生活基盤を築いて次世代にバトンタッチした後、自分のロマンを追求した。しかもその業績が認められ、幕府の高官に抜擢起用された、という次第であるが、彼自身はこの幸運を喜びつつ、西行、芭蕉らとも通底する漂泊者魂の持ち主で、未知の風土や人情に触れることを何よりも楽しみにしていたのではないかと私には思えるのだ。忠敬も究極のところ、人間とその生き方に尽きせぬ探求心を持った人だったのだらうな、と勝手に推察し共感している私である。

第九次測量

(東京都世田谷区) 江川 洋

全国の協力者の子孫が集まるという大変ユニークな試みであったと思います。それだけに伊能隊の調査が国を挙げての一大事業であることを改めて実感いたしました。先祖がその歴史的事業に関わったという事実を皆誇りに思っているという事実を皆誇りが会場全体を包んでおり本当に素晴らしい会でした。伊能家御子孫の一人とお話をするのができそのお人柄にも触れられ大変嬉しかったです。会を準備された皆様、大変ご苦労様でした。参加でき本当に良かったです。

(会員・会友)

伊能忠敬研究会の皆様への意気込み
に感謝

(香川県さぬき市) 石原博司

私は、伊能忠敬研究会の会員でもなければ、伊能測量隊への協力者の子孫でもありません。その点から考えると、今回の顕彰大会への最も気楽な参加者であったと思っています。

私が卒業した小学校の閉校記念誌の作成を手伝わせていただいた中で、校区内で測量隊一行が四泊(天候が悪くて動けなかった)もしていることに気が付きました。その宿泊先の子孫を探るうちに、「伊能忠敬研究会」の存在や「伊能測量協力者顕彰大会」が開かれるようになっていることを知ったのです。

測量隊が高松藩(香川県東部)内の海岸線を歩いた時の案内役の中心が、古高松村政所(高松藩では庄屋のことを指す)上野瀬平でした。彼が残した「海岸測量日記」(実物は揚家より香川県立文書館へ寄託)と題された記録が存在することを戸村茂昭様に連絡させていただいたところ、「顕彰に値する協力者(忠敬の残した「測量日記」に9回もその名前が登場する)なので、是非とも子孫の方に参加していただきたい」という申し出を受けることになりました。そのことをご子孫である

揚孝子様・揚三容様親子にお知らせしたところ、出席を快諾してくださいました。そのような経緯から、なぜか私も参加させていただくことになったのです。

戸村様や前田幸子様によりまず、「測量隊は本当に四国へ行ったのか？」という疑問を提起する人がいたことなどから、研究会の中では「海岸測量日記」の存在はほとんど知られていなかったようです。今後、研究会の皆様による当該資料への様々な視点からの読み込みをお願いしたいと思います。

顕彰大会での配付に向け、研究会の皆様が様々な冊子を作っておられました。それぞれの冊子を読ませていただき、伊能研究に対する意気込みやその内容の深さに驚かされました。私のような歴史の素人にも納得できるものばかりでした。皆様が十分に時間をかけ、足が地に着いた研究に取り組みされていることがよくわかりました。また、戸村様を中心としてホームページ上に大会記録写真集を公開するなど、丁寧な事後処理ぶりにも感激しております。

末筆ながら貴会の益々のご発展を祈念いたします。立川志の輔さんではありませんが「百年後の没後三百年の記念行事」が楽しみです。ありがとうございました。

「ご子孫・ご先祖様と伊能忠敬翁は共に満足されたのでは！」

(埼玉県蓮田市) 伊東孝

初日の「顕彰式」「懇親会」「記念落語会」、二日目の「史跡探訪」「源空寺での二〇〇年法要」、どれも素晴らしいものでした。

「顕彰式」では、伊能測量に協力したご先祖様への篤い感謝の思いが、会場全体を包み込みました。

「懇親会」は、同じテーブルに坐った者どおしが、直ぐに打ち解け合って和やかに会話する様子が、多くのテーブルで見受けられました。

「記念落語会」の演者・演目は、立川志の輔師匠の「大河への道」伊能忠敬物語」でした。

志の輔師匠は実力・人気共に兼ね備えた当代きつての落語家ですが、開演後、直ぐに落語の世界に引き込まれ、時間の経つのを忘れるほどの名演でした。

良く練り上げられたストーリーと、志の輔師匠の巧みな話術で、伊能忠敬の人となりや偉業が、涙と笑いを誘いながら、舞台の上で生き生きと演じられました。

そして落語上演後に、スクリーンに映し出された映像と文字情報は、参加者の誰もが予想していなかったと思われるだけに、強く印象に残りました。最後に高座に再登場した志の輔師匠が、観客に呼びかけて行った三本締

めの手締めも、時宜にかなう演出と心底感心しました。

「史跡探訪」では、伊能忠敬の偉大な業績を、碑文・説明板・標柱・銅像などを通じて、リマインドすることができました。

そして最後に「源空寺での二〇〇年法要」に参加したことで、伊能忠敬翁に対する尊崇の念を一層篤くし、今後その偉業を子々孫々に語り継ぐことの大切さを、改めて噛み締めました。

2日間に亘る行事を俯瞰しますと、ご子孫を通じてご先祖様に当会からの感謝とお礼の気持ちを、また墓前では、伊能忠敬翁への感謝と尊崇の気持ちを、それぞれ念じ奉るものですが、その全てを滞りなく、しかも、当初に想定したレベルを遥かに超えて、実現させたのではないのでしょうか。

これにより、ご先祖様及び伊能忠敬翁は、共に草葉の陰で心の安寧が得られると共に、次の追善供養の機会まで、再び安らかな眠りに入られたと、思料します。 合掌

(三重県亀山市) 岩本敏

この度の顕彰大会で、落語会のお手伝いをさせていただいた岩本です。本日、伊勢亀山へ戻って参りました。意義深い催しのお手伝いをさせていただいたことを嬉しく誇りに思いいます。

志の輔師匠の落語会を！との拜命を受けて一年半余、当初は実現を断念せざるを得ないかもしれないと思うような事態が続く、師匠ご自身が研究会の人々の前で演ずることを躊躇されていましたが、説得を続け、実現にこぎつきました。その間、いくつもの無理難題に関して、渡辺さま始め、事務局の方々に多大なるご心配とご配慮をいただきました。

私が初めて立川志の輔師匠の創作落語の大作『大河への道』伊能忠敬物語』を聴いたのは、初演から間もない十年近く前のことになりました。

研究会の一員に加えていただきましたと思うたきっかけのひとつが師匠のこの創作落語でした。以来、研究会の催しで志の輔師匠のこの演目を高座にかけていただける機会を夢見ておりました。

期せずして、顕彰大会の機会に……というお話をいただき、ぜひ私にお手伝いさせていただきたいと、落語会の運営を志願させていただきました。偶然が偶然を呼び、私が現役時代に仕事として毎月落語会を開催していた内幸町ホールが会場候補に挙がった時は、心密かに、「これはうまく行くかも知れない」と思ったものでした。

久しぶりに落語会のプログラムや影アナ台本などを制作する作業に従事させていただき、何よりも、何度か志の輔師匠と直接話をして顕彰大会

の意義などを説明する機会が持てたことは、長年落語の世界に多少なりとも関わりを続けてきた私にとつて、たいへん幸せな時間でございました。

このような機会を与えてくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。源空寺での法要が始まった、まさにその時に、私の携帯電話に志の輔師匠ご自身から直接電話がかかって来ました。「岩本さん、昨日は、とても貴重な経験をさせてもらいました。渡辺さん、伊能さんはじめ研究会の方によるしくお伝えください」という電話でした。落語家ご本人、特に志の輔師匠のような大看板の方から直接電話をいただくことはかなり希なことです。

昨年来、この『大河への道』伊能忠敬物語』は、九〇分以上を要する大作ということもあり、師匠自身が「もう、あまりやりたくない」と思う演目になつていましたが、今回の研究会の催しがきっかけで、伊能忠敬の偉業についてももう少し深く知りたいという気持ちが師匠に芽生えたことは間違いありません。おそらく今後、この演目はヴァージョンアップを続けながら、志の輔師匠の代表的創作落語の一つとして演じ続けられることが期待されます。

多少なりとも皆さまに喜んでいただけた落語会を運営できたことを、有り難く思います。ご協力ありがとうございました。

大会運営に携わられた皆さまにお疲れが生まれようにならぬように……今後とも宜しくお願い申しあげます。

志の輔落語の世界

(三重県亀山市) 大星正嗣

二〇一八年四月二十一日・二十二日、東京学士会館で「伊能忠敬没後二〇〇年記念事業」が開催された。

私にとって伊能忠敬との出会いは、一九九八年全国を二年間に渡りその足跡をたどり歩き続けた「伊能ウォーク」です。これは日本土地家屋調査士会連合会が広報事業として企画し、二〇〇〇年一月に東京日比谷公園に日本全土を完歩したウォーク本部隊と再会を果たした感激は忘れられない思い出です。

その後二〇〇九年四月「完全復元伊能図全国巡回フロア展」が東京深川スポーツセンターを皮切りに、二〇一五年佐賀県唐津市でのラストフロア展の活動まで多くの伊能関係者と関わりを得る事が出来ました。そして私の中では今回の「伊能測量協力者顕彰大会」に引き継がれています。

顕彰大会では来賓の国土地理院村上院長をはじめ、伊能家八代当主、伊能家ゆかりのご子孫、そしてこの度、功績感謝状を受賞された「伊能測量協力者」のご子孫の方々、伊能研究会のメンバー、その他関係者を含め二〇〇

人を超える大きな大会となりました。

次に会場を移し、懇親会の席に着くとテーブルで国土地理院の村上院長と同席となり、院長が他の同席者と一緒に語り掛けてくれて、石黒信由と伊能の関わりや岩手県陸前高田肝いりの黄川田与兵衛が残した書状の話、また伊能とは絵師として随行し地図作成に尽力した方の話等々大変興味深く、伊能の世界にタイムスリップしたような不思議な雰囲気の中でこの時を過ごす事が出来ました。

ここから大型バスで移動、学士会館を後にして内幸町ホールに向かい、立川志の輔独演会「大河への道」伊能忠敬物語」へといざなわれる事となります。

薄暗い会場に高座だけがスポットで明るく照らされ、そこに立川志の輔師匠が鎮座し、開口一番「今日は伊能忠敬さんゆかりの人ばかり、もし間違った事を言ってもお許しください」といったかと思うと、語りの途中で会場に向かつて「忠敬が幼少のころ過ごした村の名前は何だっけ！」と問いかける。会場が「・・・」となると、すかさず志の輔師匠から「この程度でよかった」と会場に笑いを誘います。観客は冒頭のつかみでマジックにかげられたように一気に志の輔の世界に引き込まれ、思いもよらない多彩な言葉に酔いしれました。多くの登場人物を自在に操り、志の輔師匠がいつの間

か千葉県佐原市の「伊能忠敬記念館」に入り、彼が伊能忠敬にのめり込んだエピソードを語り始めました。ここで見た伊能図が現代の衛星写真で映し出された日本列島がオーバーラップするのを見て心が震えた。という話を真剣に語り掛けてくるかと思うと、突然小学生の見学者が出てきて「なーんだ北海道がズレてるじゃん！」と言わせ会場が笑いに包まれます。

人生五〇年と言われたこの時代に五〇歳を過ぎて天文学を学び、二〇年近く日本全土の沿岸を歩き続けて地図を作るという常人では考えられない情熱、体力に至っては最新の測量機器を駆使して測量に携わる現在の我々の場合にとっても困難を極める事であることは相違ありません。

そして地図の精密さに感動し「志の輔落語」と呼ばれる独自の世界観の中で、もがき苦しんだであろう4年の歳月をかけた2時間を超える大作として「大河への道」伊能忠敬物語」が完成したといえます。

物語は突然、伊能の大河ドラマを制作する編集者と脚本家の話になります。

脚本家が大河ドラマの脚本をもつて県庁の職員二人と明日の編集会議に向けて事前協議をするシーンで時代の空気感、声色の変化、緩急自在の展開に会場は志の輔師匠の話に必死についていきます。

脚本家は「伊能忠敬の物語はどうしても書けない」という。職員は明日に迫った大河ドラマのプレゼンに焦り、職員のうち課長が脚本家に必死に食い下がる様子は、悲しくもあり可笑しくもあり、この駆け引きは登場人物の切迫した息遣いまで感じるリアリティがあり見応えがありました。会話は重苦しいものなのに、話術の巧みさで笑いを誘い会場を和ませてくれます。

脚本家の苦しい胸の内を切々と語る様子は、会場のみんながこの大作の創作に志の輔師匠がもがき苦しんだ創作の様子に重ねて聞いていたのではないかと思っただけでしよ

うか。脚本家がこの物語が書けない理由として、伊能図完成の三年前に伊能忠敬がなくなってしまう事を挙げています。

県庁職員に対し、伊能忠敬の年表を示しながら声を潜め、時代を一幕府天文方高橋景保に遡って伊能の死をめぐる秘話を語り始める。景保は「ここで伊能の死を公表してしまうと伊能図は伊能忠敬のものでなくなってしまう」という。地図は伊能の死後、天文方下役と門弟によってすすめられ、足掛け17年に及ぶ全国測量の成果として伊能忠敬没3年後に「大日本沿海輿地全図」が完成することになります。

景保がお寺の住職に伊能の死を公

表しないようお願いするところは声を潜め、幕府の上役から「伊能はどうした!」と迫られるところは大声で、言い逃れをしながら隠し通す語りのところは緊迫した雰囲気させといて、幕府の上役を三枚目に仕立てて会場を爆笑の渦に巻き込んでいきます。いよいよクライマックスで、將軍の前に伊能図を上程する事になります。

高橋景保が將軍から「伊能忠敬はいかがいたした」と聞かれ、景保は「次の大広間に控えております」と告げる。大広間のふすまが開くと、そこには「大日本沿海輿地全図」がところ狭ま

しと広げられ、將軍は目を見張り景保に向かつて「もう一度聞く、伊能忠敬はいずこに」景保は死を覚悟して、ここで初めて真実を語る。「伊能忠敬は三年前に亡くなりました。しかし今日はここ私のとなり座っております」という。將軍はここで伊能忠敬に向かつてねぎらいの言葉を発し、景保は大役を果たした安ど感と將軍の心の大きさに感服するシーンに私は思わず涙してしまいました。

フト周りを見渡すと会場全体が暗闇の中で静まり返り震えているように思えました。

ただ不思議な事に話の中で伊能忠敬本人が語るところが一度もありませんでした。これがこの落語のオチだったのかも知れない。

終わりにあたり「忠敬没後二百年記

念事業」に参加して改めて、伊能忠敬の功績がいかに偉大なものであったかを知り、その偉業を支えた全国各地の多くの測量協力者の存在が再認識されると共に、全国から集まったご子孫の方々が、伊能忠敬を尊敬し誇らしげに語る姿はとても印象的でした。私も「伊能忠敬研究会」の一員としてこの大会に参加できたことに感謝申し上げますと共に「志の輔落語」の世界を堪能させていただきましたこと、本当にありがとうございます。

夢の企画

(千葉県市川市) 柏木隆雄
催しごとの企画を実施するには諸々の協力を必要とする。

今回の支援者顕彰会では、伊能忠敬研究会会員の協力が並々ならぬものであった。

研究会の創立者であり、名誉会長でもある渡辺一郎氏の発案で始まった事業であったと思うが、伊能測量から二〇〇年を経た今、この夢のような催しに参加された支援者子孫の誰もが、伊能測量との関わりを誇りに思うと語ったとき、主催者側のそれまでの努力は報われた。

ただし、この企画の成功の最大の功労者は伊能忠敬その人だと思う。

日々の行動を克明に記録した測量日記がなかったら支援者の掘り起しは不可能であった。

私事になるが、この企画のお陰で柏木家と血縁となる忠敬次男の秀蔵の直筆書翰に触れることができた。

広島市から参加予定だった岡本みよ様から事前に書翰のコピーが届いた。

残念ながら当日は、健康不良のため急に不参加となられたので秀蔵の書翰の由来などお聞きすることができなかった。

文面からは風雅の趣も感じとれた。これまで忠敬から勘当され粗暴な男と伝えられてきた秀蔵の人物像が少しは好転するのではないかと、これは身内の心情でもある。(柏木幸七子 拜)

伊能忠敬没後二〇〇年記念顕彰会を終わって

(茨城県水戸市) 川上 清

私は伊能ウオーキングがあった一九九九年に茨城県の伊能ウオーキングに携わり会員になりましたので、会員歴間もなく二〇〇年です。研究会のメンバーにはウオーキング実技者があまりおられませんが、伊能ウオーキングの中でも研究会代表のような形で、活動させていただきました。本部隊が二年前で七百数十日歩きましたのに、私はその一割の七〇回余、妻が三〇回ほど全国に追いかけて隊を続けました。松江市で、二人揃って表彰を受け、朝日新聞に本部隊記事とともに掲載された

のは感激でした。

理事名誉代表の渡辺一郎様には最初からお世話になりました。渡辺様は歩測を採用し、伊能さんに併せて正しい歩数で歩くことを計るよう勧められました。今は日本ウオーキング協会関係では茨城県の国土地理院内での会場で行うつくば国際ウオーキング大会にだけ残っています。私は渡辺様から、さすがウオーカー、正確とお褒めを頂きました。

今回の測量協力者顕彰大会は渡辺様の総ての事業の最終段階、即ち集大成であると思います。現役では通信関係の事業をされた方が、全く畑の異なる伊能忠敬研究に携わり、それこそ伊能忠敬の神髄をまで固めた方が、伊能地図を製本し、アメリカでは大図を発売されたり、その活躍は顕著なものと呼ばれます。改めて大図を各県一カ所目標に展示が決められた時、茨城県水戸市が真っ先に手を上げその年の六月に開催し、三〇〇〇人を集めることが出来ました。

渡辺様は考えられる総てを成し遂げられ、二〇〇年前の協力者を顕彰することを思い立ちました。世の中には普段あり得ないことです。それをやることで伊能忠敬に代わり、感謝する立場に立たれました。それは関係者の強い賛同の下、実現しました。

私の当日のたった一枚のスナップ、これこそ渡辺様の独喧場、代表の方に

感謝状を渡す役は組織の中で行われても、個人紹介は渡辺様だけが出来る最重要事でした。ご立派です。

研究会のメンバーを続け、最大の悲しみは伊能陽子さま、井上靖子さまの世界でした。この日まで元気でおられたらと残念に思うものです。

お手伝いできたことを感謝申し上げます

(福島県須賀川市) 鈴木由生子

四月二十一日・二十二日に開催されました伊能忠敬没後二〇〇年記念伊能測量協力者顕彰大会の大成功、誠にありがとうございます。

御出席された皆様の笑顔に接することができましたこと、私も微力ではありましたが実行委員の一人として携わり、とても感慨深い気持ちでおります。

私の役割は総幹事である渡辺一郎名誉代表のご指示により、顕彰大会当日の準備物を揃えることでした。

昨年行われた最初の打ち合わせの際、まず第一に渡辺名誉代表は出席される方々の名札をとっても重要視されていきました。顕彰大会当日において、出席者がそれぞれの方々の名札に記載された情報をご覧になることにより、コミュニケーションが盛んに行われることがとても大事であり、それが成功に繋がるのお考えがありました。特に御子孫の方々の名札には配慮

をされていきました。御子孫の名札には「測量当時の地名」「御先祖の役職名とお名前」「出席される御子孫または代理や同伴者のお名前と現住所都道府県市町村名」を記載しなければならず、一般的な名札ケースでは対応できません。大きな正方形サイズの名札ケースとそれに合わせるピンを別に探してオリジナルの名札入れを準備、記載内容を見やすく表示した名札を完成させることができました。出席者の名札本体の作成と印刷は三重県名張市の会員・竹村基さんです。データやサンプル写真はメールでのやり取り、時に郵便もありました。特殊サイズ名札を印刷した用紙は三重から送付され、私の方でカットし名札ケースにセットするという連携で完成しました。名札は翌日のバス巡りでも使用し、両日の参加者交流の役割を果たすことができましたのではないかと感じています。

また顕彰式・懇親会では名札と共に紅白のバラの花の徽章が出席者の皆様の胸元を飾りました。壇上の御来賓と役員の方々には特注での名入れバラでの対応としました。特別な記念行事である為、出席者全員に華やかなバラの花を装着してもらいたいとの渡辺名誉代表のお考えでした。

その他、懇親会テーブル担当者等の五方徽章、表彰状を納める賞状筒、記念品等を入れる紙袋、ポスターケース、

落語会指定席券及びバス乗車券用封筒を準備し、賞状筒・紙袋・封筒に貼る名前シールをそれぞれの大きさに合わせて作成。各準備物はサンプルとして一部購入し、総幹事が品質や強度等を確認後に必要数購入。懇親会席札(竹村さん作成のテーブル毎着席順の仕分け作業は開催週に行いました。大会前日の準備作業では名誉代表の奥様にお手伝いいただき感謝しております。

現代の通信と物流の発展により、メンバー同士が遠距離であっても作業の連携ができるようになり、そのことを実感しました。もちろん直接お会いして打ち合わせを重ねることは大切なことと思っています。渡辺名誉代表の顕彰大会に懸ける想いをお伺いして「想いをかたちにしてゆくことの重要性」を教えていただいたように思っております。

顕彰式・懇親会では晴れやかな皆様表情を、落語会では大きな笑い声、周囲の方の感動の涙を目にいたしました。そして翌日も快晴、皆様お元気でゆかりの地の史跡を巡り、解説者のお話にとっても感心されている様子でした。墓前法要の直後には御子孫の方から「顕彰大会に招待いただき御先祖様の代に交流があった御子孫様とお互い初めてお話ができました」と喜びのお声掛けをいただきました。

顕彰大会における会員の皆様の結

束力、素晴らしいそれぞれのご活躍には感銘を受けました。

伊能忠敬没後二〇〇年記念行事の中で役割を務めさせていただき、私自身、とても勉強になり大変貴重な経験となりました。

ありがとうございました。

(千葉県東金市) 高宮 勲・リヨ子

二日間に亘り、伊能測量協力者顕彰大会に参加させて頂き有難うございました。

数多くの貴重な体験をさせて頂きましたが、心に残った幾つかの場面について感想を纏めてみました。

第一部の顕彰式には、伊能測量協力者の子孫70家が全国からご出席されました。夫々の家が伊能測量隊に協力された誇りを、家伝として現代迄語り伝えられている事に深く感銘を受けました。

功績感謝状を受けられた皆様の中には、子供さんや若い世代の方々も見受けられました。この式典の全ての光景が、後世まで語り継がれる事と思えます。

第二部は立川志の輔師匠の記念落語会でした。数ある演目の一つに伊能忠敬物語が有る事を噂では聞いて居りましたが、今回そのお話を聴くという千載一遇のチャンスに恵まれました。

師匠は香取市を訪れた際、ふと立ち

寄った伊能忠敬記念館で、伊能図に人工衛星から写した日本列島の写真が重ね合わさった瞬間、鳥肌が立ったと話しております。伊能忠敬の業績にすっかり魅了された師匠は、その思いを落語に託して国内外で語られているそうです。スクリーンに映し出された伊能図と、師匠の音頭による三本締め、快い響きが、参加者全員の脳裏に永遠に焼き付けられた事でしょう。

第三部の史跡探訪で訪れた大半の場所は、写真でしか観た事が有りませんでした。今回詳しい説明を聞きながら、全ての史跡を見学出来た事は大変有意義でした。

富岡八幡宮の伊能忠敬翁の銅像を制作された酒井先生から、制作意図について直接お話を伺えたのは大変幸運でした。銅像制作で一番難しい点は「顔立ち」で、皺や口元に配慮を重ね、年齢差や心情を表現されたそうです。北海道に新たに造られた銅像とは表情に違いがあるようなので、是非逢いに行ってみ比べさせて頂きたいと思っております。

また、今回頂いた忠敬没後二〇〇年記念誌「伊能忠敬日本列島を測る」前後編は、忠敬翁の足跡を辿る貴重な手本です。国内旅行をする際には必携の指南書と致します。

最後に、この壮大な顕彰大会を用意周到に企画し、厳粛に運営された渡辺一郎先生はじめ、連絡案内主任を担当

された戸村茂昭様、そして関係された全ての皆様方のご努力に心からお礼申し上げます。

忠敬翁と測量隊員も当時を回想しながら、さぞかし天国で喜んで呉れている事でしょう。

「二百年後の末裔」に囲まれて

(熊本県和水町) 平田 稔

今から約二百年前の十年間ほど、伊能忠敬さんが世話になった全国の人たちのご子孫が集まってもらい、忠敬先生の子孫と伊能研究会等の会員が、先祖の測量支援活動を顕彰し、末裔に感謝状を手渡すという奇妙な催し。こんな滅多に見られない大会に参加しないテはないと、いち早く参加を名乗り出た。

大会当夜の立川志の輔師匠の“枕”にあつたように「なんじゃこの催しは！」というのが、多くの日本人の率直な受け止め方でしょう。しかし、参加した私は、末裔の皆さんに囲まれて、妙に荘厳な雰囲気を感じたのでした。今から二百年前ですよ。その後、明治新政府が生まれ、西南戦争があり、日清日露太平洋戦争があつて、経済大発展を成し遂げて、今の日本の姿があります。

その間、全国津々浦々の先祖代々、勤労にいそしみ、技術を生み出し、家族を育ててきた、その確かな血縁を刻み込んだ顔、顔が会場を埋めていたの

です。私の目の前や周囲にあつたのは、歴史に名を残した人や、歴史を陰で支えて来た人の、紛れもない末裔の皆さんでした。

「ご先祖が伊能忠敬の測量を手伝ったことは全く知らなかった」のが、多くの参加者の本音だったようです。でも、それを今知った人たちが、晴れやかな顔で会場に並んでおられる。歴史に多少首を突っ込んでいる私にしてみれば、これはもうドラマの舞台そのものの気がしたのでした。

「あれから二年」「あのときから二十年」—自分の日頃の時間感覚は長くてもせいぜい、その程度です。「あれから二百年」と思うことなど、本を読み、テレビ映像を観ているときくらいです。でも顕彰大会の会場で、「そうか、二百年の歴史がこの場に詰まっているんだ」という思いにとらわれたのです。

ですが、自宅に戻ってしばらくして「なんだ、二百年てこのくらいか」という思いが生まれたのも本当です。なぜなら四百年、五百年、千年もその延長でしかない？ そのままで達観するには至りませんが、滅多に味わえない現場に立ち会えたことを喜んでいきます。

立川志の輔記念独演会・伊能忠敬の物語「大河への道」

(福島県須賀川市) 松宮輝明

四月二十一日(土) 学士会館での伊能忠敬顕彰大会懇親会を終え、バスで内幸町ホールへと移動しました。

立川志の輔師匠の伊能忠敬物語「大河への道」の観劇となりました。二〇〇余名の観覧席は満席です。

昭和三十年代、学生の頃、上京すると必ず寄席に足を運んだものでした。戦後の名人と云われた古今亭志ん生、円圓、文楽などを最頂にしました。

志の輔師匠はNHKの人気番組「ためしてガッテン」の名司会者と知られており落語会の天才談志の弟子でもあります。

このたびは「大河への道」伊能忠敬物語「九十分の落語」です。

落語は普通、講座で真打が十五分、トリが十分ですが、九十分の落語は初めてでした。期待で胸が高鳴ります。枕が始まりました。

忠敬が学ぼうとしたのは「地球の大きさを知りたいから」。

人生五十年の時代に、五十二歳から七十一歳まで、自分の足で日本中の海岸を歩いて測量し、初めて日本地図を作った男の情熱、知性、体力が現代の私達の生きる道しるべです。

志の輔師匠の話が続きます。

嘶家の志の輔師匠の生き方が忠敬の生き方に重なります。

「一人の男の人生を、自らの落語の世界に引き入れたい」と云います。この伊能ものがたりを描くには苦勞したと云います。

この演目は志の輔落語の中でも作品作りの大作の一つなのでしょう。独特の切り口で、伊能忠敬に迫る内容。迫真の描写です。

周りの席からは、ハンカチを目にあって涙を流す観客。伊能をお世話したご先祖の孫方々の姿が目につりました。

そして伊能の生涯を、緩急自在の語り口で描かれてゆきます。

後半、伊能図の完成を待たず忠敬が亡くなります。

弟子たちは喪を伏せて、三年後に伊能図が出来上がりました。

伊能図を上覧した折、十一代將軍家斉が云います。「伊能忠敬はどこに。忠敬は前へ」会場がしんと静まり返ります。暗転した客席の先、そこだけが明るい高座に、志の輔が、いや伊能が見えました。

万来の拍手が鳴りやまず。伊能の偉大な足跡に酔いしれました。

(北海道旭川市) 安川 義巳

・厳肅な顕彰式、和やかな懇親会、更には落語会、没後二〇〇年法要と立派な企画をありがとうございます。

遠方からたくさんの方々が出席され、盛会だった事を極めて嬉し

くまた感激を致しました。

企画運営に奔走された役員の皆様、誠にありがとうございます。

細やかな部分にまで、ご配慮をいただき恐縮しています。

各地で伊能測量に協力された皆さんから、当時の実態の一端をご披露いただきました。

とりわけ、「古文幻想」白井良作「白井良雄さんのお話は貴重でした。」

ともすれば、出来上がった地図にばかり注目が集まりますが、その過程の奥深さに感動致しました。御用測量に伴った地域負担の重さに驚きました。

この度の企画は、蔭で支えた部分をしっかりと評価すると云う大変良い企画だと改めて、その意義深さも感じました。

・志の輔さんの落語独演会も圧巻でした。

伊能測量は、地道にこつこつと積み上げた事跡です。しかし、それ故に大河ドラマには仕立てずらいとの指摘があつて実現に至らない様です。でも、地道な技術者や実務家にもつと目が注がれる世になってほしいものです。測量を生業とする者としても、心から願う処です。

・源空寺での没後二〇〇年法要に参列できた事は大変名誉な事でした。

住職の講話には、この後三〇〇年、四〇〇年と伊能さんや高橋さんの菩提と事跡を守って下さるとありまし

た。改めて感激しました。

・都内忠敬史跡めぐりの車中では、同席していただいた田野圭子さん(稲さんの血流)からはシーボルトのお話をしていただきました。第80号の記事を拝見しながら、小柄な方でありながら、何とパワフルな方と勇気をもらいました。

・沢山の企画、きめ細やかなご配慮に感謝致します。同時に自己の協賛金の少なさに身の縮む思いです。心からありがとうございます。

伊能測量協力者顕彰大会

越後国の協力者は
(新潟県三条市) 山浦 佐智代

顕彰大会に参加してくださった、伴田ご夫妻様の御先祖は村上藩上岩船の年寄(庄屋)であった。第三次測量中の享和二年九月二十一日(一八〇二年十月十七日)、伊能忠敬測量隊は(以後、測量隊と記す)止宿している。現在、屋敷の表門脇の塀には「伊能忠敬宿泊記念」の案内板が設置されていて、そこには、当主の伴田与惣左衛門が詠んだ歌も、掲載されている。その内容は、忠敬が天測できるように、雲が去って欲しいと、願った歌であった。幸い、雲間が開き、願いが叶い天測できたのだ。

さて、伴田家を後にして八日後の、九月二十九日(一八〇二年十月二十五日)測量隊は出雲崎の橘屋(本陣・名

主)に止宿した。橘屋は、歌と書で有名な良寛の生家である。良寛は長男であったが、家督を弟の由之に譲り、出家の道を選んでいった。宿泊した時の当主は、由之である。顕彰大会に参加してくださった山本良一様は、由之の御子孫で、現在は良寛会でも活躍されている。

測量隊は第四次測量の時、佐渡へ渡った。享和三年八月二十九日(一八〇三年十月十四日)廻船業の浜田屋治左衛門(笹井)宅に止宿している。接待は、四男の笹井秀山が任された。この秀山は、治左衛門から廻船業を引き継いでいたが、その生業で体験したこと

を「海陸道順達日記」に書き著した。現在、この本は「海陸道順達日記」佐藤利夫編が、法政大学出版局から販売されている。顕彰大会へ参加してくださったのは御子孫の笹井敦子様の娘・白井尚子様である。

今回、この大会に際して、身近な地域から、協力者のエピソードなどを集めることができた。これからも協力者の歴史や、エピソードを集め学びたいと思っている。

寄付者名簿

伊能測量協力者御子孫

- 赤井公義 (兵庫縣篠山市)
- 揚 三容 (香川県高松市)
- 朝倉 昇 (横浜市磯子区)
- 石黒信二 (富山県射水市)
- 江川 洋 (東京都世田谷区)
- 小野友子 (東京都調布市)
- 小野恵美子 (静岡県掛川市)
- 小野公三 (大阪府高槻市)
- 加賀尾宏一 (兵庫縣篠山市)
- 加藤浩也 (千葉縣市川市)
- 桂 文子 (京都市亀岡市)
- 川口正志 (長崎県東彼杵町)
- 黄川田澄子 (岩手県陸前高田市)
- 楠本武之 (兵庫縣伊丹市)
- 久保山隆吉 (福岡県久留米市)
- 坂野 正 (東京都練馬区)
- 佐々木清之助 (鳥取県鳥取市)
- 須賀原修二 (岩手県盛岡市)
- 坪井隆治 (東京都武蔵野市)
- 手銭白三郎 (島根県出雲市)
- 友田修司 (東京都杉並区)
- 中島 惇 (佐賀県江北町)
- 中村美代 (東京都新宿区)
- 橋本 茂 (静岡県熱海市)
- 伴田 攻 (新潟県村上市)
- 松木英一郎 (山形県横手市)
- 三木敏明 (兵庫縣姫路市)
- 宮下幸一郎 (福井県美浜町)
- 山根季久子 (広島県福山市)

和田正希 (和歌山県大地町)

会友有志の寄付者

- 石原博司 (香川県さぬき市)
- 稲垣 実 (東京都町田市)
- 北岡浩美 (兵庫縣神戸市)
- 佐藤由紀 (東京都豊島区)
- 山本富子 (福井県美浜市)
- 日本ウオーキング協会会長
- 日本土地家屋調査士会連合会会長

伊能忠敬研究会員

- 秋葉和子 (東京都台東区)
- 秋間 実 (神奈川県逗子市)
- 石川清一 (福岡県福岡市)
- 石島博行 (千葉縣銚子市)
- 石橋輝樹 (新潟県新潟市)
- 市川三津夫 (長野県須坂市)
- 伊東 孝 (埼玉縣蓮田市)
- 井上辰男 (福岡県筑前町)
- 伊能楯雄 (千葉縣香取市)
- 伊能 洋 (東京都世田谷区)
- 伊能二三代 (北海道札幌市)
- 猪原紘太 (東京都小平市)
- 岩本 敏 (三重縣龜山市)
- 江口俊子 (千葉縣山武市)
- 榎本隆充 (東京都新宿区)
- 大内惣之丞 (千葉縣習志野)
- 大西道一 (兵庫縣神戸市)
- 大沼 晃 (神奈川県藤沢市)
- 大庭 功 (東京都世田谷区)

- 大星正嗣 (石川県七尾市)
- 大宮信篤 (愛媛縣松山市)
- 大八木照行 (神奈川県茅ヶ崎市)
- 奥永 渚 (福岡県福智町)
- 海保英之 (千葉縣横芝光町)
- 柏木隆雄 (千葉縣市川市)
- 柏原俊治 (東京都世田谷区)
- 香取禧良 (千葉縣香取市)
- 香取孝勇 (千葉縣香取市)
- 香取 武 (千葉縣香取市)
- 川上 清 (茨城県水戸市)
- 河崎倫世 (石川県金沢市)
- 河島悦子 (福岡県筑紫野市)
- 河西 浩 (山梨縣甲府市)
- 河野時巧 (千葉縣九十九里町)
- 木内志郎 (東京都大田区)
- 小池美幸 (東京都東久留米市)
- 小坪 隆 (福岡県久留米市)
- 小林一三 (新潟県新潟市)
- 小林順三 (神奈川県相模原市)
- 齋藤サダ (北海道函館市)
- 酒井道久 (神奈川県横浜市)
- 島田泰枝 (千葉縣銚子市)
- 嶋田秀樹 (長野県須坂市)
- 城野幹丈 (佐賀縣嬉野市)
- 神保弘之 (千葉縣横芝光町)
- 菅井慎一 (千葉縣香取市)
- 鈴木準二 (東京都港区)
- 鈴木皓之 (東京都杉並区)
- 鈴木純子 (東京都東久留米市)
- 鈴木由生子 (福島縣須賀川市)
- 関根秀次 (東京都文京区)
- 曾根田馨 (福岡県福岡市)

- 高木崇世芝 (北海道札幌市)
- 高宮 勲 (千葉縣東金市)
- 高宮啓明 (千葉縣東金市)
- 高宮 宏 (千葉縣東金市)
- 高宮リヨ子 (千葉縣東金市)
- 高安克己 (千葉縣松戸市)
- 田野圭子 (千葉市若葉区)
- 玉造 功 (千葉縣香取市)
- 千邑重徳 (千葉縣香取市)
- 中尾 宏 (滋賀縣草津市)
- 中塚徹朗 (北海道福島市)
- 永野達代 (神奈川県鎌倉市)
- 中村泰子 (茨城県下妻市)
- 西川 治 (東京都多摩市関戸)
- 野上哲夫 (茨城県龍ヶ崎)
- 橋本かなえ (千葉縣東金市)
- 馬場良平 (佐賀縣武雄市)
- 菱山剛秀 (東京都八王子市)
- 平川定美 (長崎縣佐世保市)
- 平田 稔 (熊本縣和水町)
- 平野 実 (佐賀縣武雄市)
- 堀野正勝 (茨城県土浦市)
- 前田幸子 (東京都稲城市)
- 松尾紀成 (佐賀縣嬉野市)
- 松宮輝明 (福島縣須賀川市)
- 宮内 敏 (千葉縣銚子市)
- 室山 孝 (石川県金沢市)
- 安川義巳 (北海道旭川市)
- 山浦佐智代 (新潟縣三条市)
- 山本公之 (東京都小平市)
- 吉田安津子 (東京都練馬区)
- 伊能忠敬研究会
- イノペディアをつくる会

会員だより

新入会員自己紹介

(福岡県)中野 直樹



福岡県田川市は明治期の炭鉱開発のために、近世の町や地名が失われ伊能忠敬の測量経路復

元には困難が伴います。総合的な学習で学ぶ中学生の疑問に応えるために、田川郷土研究会では、平成28年に市民有志と「伊能忠敬の歩いた道プロジェクト」を立ち上げ、伊能忠敬ウォーキングを行うようになりました。その中で古い地図・写真や伝聞がよせられるようになりました。そこで、平成29年度に田川市立図書館、博物館と供にA D E A C (アデアック)に「筑豊・田川デジタルアーカイブ」を立ち上げ伊能図をもとにつくられた工部省『鉾山借区圖』などの地図や測量経路図の復元、掲載に取り組んでいます。諸先輩方の研究に学びながら筑豊地方の測量経路を明らかにしてまいりたいと考えています。ご指導よろしくお願いいたします。

(東京都)佐野 明子



恥ずかしいながら伊能忠敬先生の偉業を少し齧っただけで良い歳になってしまいました

ました。研究会の先輩がスマートフォンアプリ「伊能でGo」を教えてくださいまして、ここ数箇月ほど伊能忠敬測量隊の宿泊地を楽しく巡らせていただいております。

10代で初めて伊能図を拝見した時は、陳腐ですが驚いて鳥肌が立ちました。その後、大学で測量実習を受けるなかで自身の測量成果の精度を検証した際に、伊能忠敬測量隊への畏敬の念を新たにしました。研究会の皆様が常識としてお持ちの知識も私はまだ存じ上げておりませんし、旧佐原市へ足を運んだこともございませんが、勤務先の本社から墓所である源空寺さんまで450mという御縁がございます。

勤務先では地質や地形、地下水の調査を致しております。伊能図や伊能忠敬先生についてこれから勉強して参りますので、どうぞ宜しくお願ひ申し上げます。

伊能忠敬没後二〇〇年記念

伊能大図複製パネル特別展示

—千葉県浦安市—

伊能隆男

伊能忠敬の没後二〇〇年を記念して、千葉県香取市より、原寸大の「伊能大図複製パネル(関東部分、南北12m×東西5.5m)」を派遣いただき、平成三十年三月二十日から4月22日まで千葉県浦安市郷土博物館にて特別展示が行われました。



会期中の3月21日には、伊能忠敬記念館学芸員 山口眞輝氏より宇井香取市長の親書及び目録が手交され、

その後、展示物の解説をしていただきました。また、3月25日には「伊能忠敬記念館と佐原の街並み散策」のバスツアーが実施されましたが満員となる盛況でした。4月15日には山口学芸員による講演会「伊能忠敬の生涯と伊能図」が開催されました。期間中、約六〇〇〇名の方が来場されました。

来場された方々は、実際に伊能大図の上を歩き、そのスケールの大きさを感ずることができました。また、来場者には先着順で伊能忠敬関係資料二三四五点国宝指定記念描き下ろし漫画『伊能忠敬物語(作・藤みき生)』が無償配布されました。今では東京デイズニールゾートがある街として全国にも知られる浦安市ですが、配布されたリーフレットの最後には「伊能大図パネル 浦安付近」の写真とともに、忠敬翁が浦安にも足を運んで、海岸線を測量したことが紹介されていました。それによりまずと、伊能忠敬測量隊は、第二次測量時の享和元年(一八〇一年)6月19日に浦安(堀江村・猫実村・當代嶋村)の海岸線を測量したと測量日記第4巻には記されているそうです。

第二次測量は、4月2日に、江戸・深川の富岡八幡宮に参詣し、ここから出発した後、はじめは東京湾岸を

西に向かい、三浦半島を一周して、湘南海岸から小田原、熱海を経て、伊豆半島の西海岸を北上して、東海道を東に向かって、一度江戸に戻り、6月19日、今度は東京湾の東に向けて、改めて江戸・深川を出発したそうです。小名木川村から船を回して小松川新田へ渡り、そこから二ノ江新田・下今井新田・桑川新田三ヶ村入会の字小嶋という所を通り、西浮田村・東浮田村そして堀江村・猫実村・當代嶋村という現在の浦安を通り、新井村・欠間々村・湊新田・湊村と進み、押切村に至った所で日暮れになったので、行徳宿で宿泊したそうですが、予定ではその先の舟橋で宿泊することになっていたため、荷物は舟橋に送ってしまったので、着替えなどにも困ったようです。翌20日、行徳を出て、さらに東に進み、房総半島を一周してから、銚子を経て、鹿島灘を北上して三陸海岸を測り、下北半島を一周し、その後、青森を経て、帰路は内陸の奥州街道を再測量しながら進み、12月7日に江戸に戻ったそうです。

大図パネルを拝見しながら、現在では、富岡八幡宮に近い地下鉄東西線 門前仲町駅から行徳駅まで電車で約20分。その昔、その距離をわずか1日で測量しながら歩いた忠敬翁の偉業に、改めて驚きとともに感心

しております。また、東日本大震災では市の85%が液状化で罹災し、ただ復旧復興道半ばな私たちには大きな勇気をいただきました。

伊能忠敬 没後200年記念

複製

大図

パネル

特別展示



伊能忠敬記念館 所蔵
享和元年(1801)6月19日、浦安の海岸線を測量したことが、忠敬の『測量日記』には記されている。

伊能忠敬は、日本全国を測量して歩き、我が国初の実測日本全国地図を作り上げた人物です。

忠敬は、延享2年(1745)に小関村(現山武郡九十九里町)に生まれ、17歳のときに佐原村(現香取市)の伊能家に婿養子に入りました。酒造りや金融業・運送業を営んでいた伊能家を繁栄させただけでなく、佐原村の発展に尽力しました。

家督を息子に譲ると、50歳で江戸に出て、本格的に天文暦学を勉強し測量技術を身につけました。そして、蝦夷地(北海道)を皮切りに、55歳から71歳まで、全10回にわたって全国各地で測量を行いました。忠敬は、文政元年(1818)に亡くなりましたが、弟子たちの手で地図づくりが行われ、3年後の文政4年(1821)、『大日本沿海輿地(よち)全図』が完成しました。

今年は、忠敬の没後200年にあたります。これを記念して、忠敬の出身地である香取市より、原寸大の伊能大図複製パネル(関東部分)を派遣いただきました。伊能大図の上を歩き、そのスケールの大きさを感じながらじっくり楽しむことができるものとなっています。

伊能忠敬の生涯をマンガで紹介した『伊能忠敬物語』リーフレットも配布していますので、これを機会に千葉県の人、伊能忠敬の功績に触れてみてはいかがでしょうか。



『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×4段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的なJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラ写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからない場合はJ判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第86号)は2018年10月発行 原稿×切は8月31日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています!

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行

②例会・見学会の開催

③忠敬関連イベントの主催または共催

④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

(留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

事務局メール mail@inoh-ken.org

郵便振替口座 001501607286100

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会ホームページ

○伊能忠敬e資料館「Inopedia(イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典 <http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料 <http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料 <http://www.ttrn.or.jp/~koko>

編集後記 ◇今号は、4月20日・21日に行われた伊能忠敬没後200年記念式典を特集した。◇そのため、ご投稿のあった数編の記事を次号に送らせていただいたこととお詫びする。◇特集記事は、記録を意識して編集した。特に多くの参加者から、式典に参加した感想を寄せていただいたことに感謝申し上げます。感想は皆さん好意的で、喜んでいただけたことが伝わってくる。伊能忠敬の測量に協力した人のご子孫が全国にいて、今でも伝えられていることに驚きを覚えるとともに、改めて伊能忠敬の業績の大きさを認識させられた。◇記念式典の参加者に配られた記念誌「伊能忠敬 日本列島を測る」は、伊能忠敬研究会金沢支部の皆さんが4年がかりで全国から資料を集め、さらに研究会のこれまでの成果を集成した力作である。不慣れなスタッフが最後は徹夜でまとめたとうかがった。そのため印刷後に誤りなどが発見されたが、これだけの内容をまとめあげたことに心から敬意を表する。この冊子は全国の自治体に配布されたので、さまざまな場面で活用されることを期待する。(H)